日本文典

日本芳賀矢一原著

商務印書館發行

日本文典

日本芳賀矢一原著

商務印書館發行

民國二十一年一月二十九日敝公司突遭國難總務處印刷所編譯所書棧房均被炸燬附設之涵芬樓東方圖書館尚公小學亦遭殃及盡付焚如三十五載之經營隳於一旦迭蒙各界慰問督望速圖恢復詞意懇摯銜感何窮敝館雖處境艱困不敢不勉爲其難因將需用較切各書先行覆印其他各書亦將次第出版惟是圖版裝製不能盡如原式事勢所限想荷鑒原謹布下忱統祈垂詧

上海商務印書館謹啓

版權所有翻印必究

丁未年十月初版
民國廿一年十月印行 國難後第一版
（三一五三）
日本文典一冊
每冊定價大洋柒角
外埠酌加運費匯費
原著者 日本芳賀矢一
譯述者 商務印書館編譯所
發行兼印刷者 上海河南路 商務印書館
發行所 上海及各埠 商務印書館

教授上之注意

第一篇

一本篇以教品詞之分別爲主眼。併使知動詞形容詞助動詞之活用。最後舉假名用法之概要。

二體言用言之名稱。自古用之。不獨最合於國語之性質。於心理上亦有二種之概念。於論文章之構造。尤爲必要。故於品詞名目之外。則以此總稱教之。

三形容詞之連於アリ猶動詞與各種助動詞之相連續者。名之曰形容動詞。亦形容詞之一部也。其性質爲形容詞。其活用則爲動詞。如立派ナリ詳ナリ等。從來皆謂以立派ニ詳ニ之副詞。連於アリ而成者。似此相異之點。則不可不注意焉。

四白話動詞之活用。各處微有不同。務當以東京語爲主。依便宜與地方情形。酌行教授之。

五從來稱テニヲハ爲助詞。又以助詞中之カナヤ等。加於感動詞。此雖已成爲一

般慣例。然如トトトモハ等詞。則不能不收入接續詞。故悉收入助詞之中。至於品詞之區別。本爲文法上說明而設者。在國語之性質。如此分別言之。亦殊便利也。

第二篇

一第一篇既教以各品詞之分別。故本篇以使學各種品詞互相之關係爲主眼。兼教以體言及用言與助詞之連結。或用言與助動詞之連結。最後說明體言與動詞之關係。及動詞之自動他動。主語客語補語之性質。使接續於第三篇之文章論。

二用言與助動詞之連結。謂之活用連語。助動詞則分爲時、法、式、相、四種。再加指定比較之助動詞。以表示其連結。活用連結表。乍見一若甚複雜者。然舉一可以類推。實際上生徒欲熟記此表。亦殊易易。使學者在總合之形上。知活用連語。乃本書之目的。故深願教授者善體此意。常將活用連語之全體。與白話對照教之。

三助動詞中。如ラン。メリ。マン。テン。ナン等。今文已不用之。故悉讓於中古文法。

四與助動詞之連結中。每有不合中古文法。而通用頗廣。且承認爲今文文法者。然文法以中古文法爲典型。故仍註明尙未承認。依教授者意見。卽視爲無誤。亦無不可。

五本書中之客語意義。與從來之意義。則微有不同。從來之文法書。多據西洋文典。惟他動詞之目的語。始稱爲客語。本書則鑑於日本國語之性質。凡他動詞之第二客語。如見於受身使役之時之動作者與動作命令者等。概定爲客語。故客語有連於ニ或ヨリ二助詞者。務乞注意。

第三篇

一本篇接第二篇。使學者知文法構造之概要。蓋日本國文之組織。極其複雜。不獨學者尙無定說。倘詳密言之。恐中學學生之力。尙不能負擔。故本編祇言其主要之大則耳。

二助動詞及助詞亦有作爲述語云者。不過爲便於文之說明耳。如由論理上而言。敍述之要素。則在視爲補語者。

三單文之定義。則依越茲厄爾氏之德文法。複文謂含句之單文。重文卽聯構文。單文複文重文。爲通用之名稱。故仍之。

四文之分爲平叙、疑問、感動、命令、四種。不獨據心理上基礎。於說明係結之法則。亦有莫大之便。

五於文之剖解。略舉一二條者。亦不過欲使知文之構造。較爲明確耳。至於複雜日本文之解剖。則殊覺其難。故亦不舉練習題。

日本文典目錄

第一篇　品詞之分別　一

第一章　白話與文言單語　一

第二章　名詞　二

練習一　三

第三章　代名詞　五

練習二　五

第四章　數詞　七

練習三　八

練習四　九

第五章　形容詞　一〇

練習五　一一

第六章　動詞　一三

練習六　一三

第七章　動詞之活用　一四

其一　四段活用良行變格活用奈行變格活用　一五
練習七　一八
其二　上二段活用上一段活用　一八
練習八、九　二一
其三　下二段活用下一段活用　二三
練習十、十一　二五
其四　左行變格活用加行變格活用　二七
練習十二　二九
練習十三　三〇
第八章　形容詞之活用附形容動詞　三二
練習十四　三五
第九章　助動詞及其活用　三五
練習十五　三九
第十章　副詞　四〇
練習十六　四二

練習十七　四三
第十一章　接續詞　四五
練習十八　四五
第十二章　感動詞　四七
第十三章　助詞　四七
第十四章　十品詞及品詞之轉成　四九
練習十九　五〇
附錄　五三
音便及假名用法之概要　五三
其一　音便　五三
其二　假名用法　五五
練習　六〇
第二篇　品詞相互之關係　六五
第一章　體言與助詞之連結　六五
練習一　七一

第二章　動詞活用之名稱及意義　七一
練習二、三　七五
練習四　七六
第三章　形容詞(含形容動詞)活用之名稱　七七
第四章　助動詞活用之名稱　七八
第五章　動詞與時之助動詞之連結　八〇
練習五　八五
第六章　動詞與法之助動詞之連結(動詞之法)　八七
練習六　九〇
第七章　動詞與否定之助動詞之連結(動詞之式)　九一
練習七　九三
第八章　動詞與受身及使役之助動詞之連結(動詞之相)　九四
練習八　九六
練習九、十　九八
第九章　形容動詞與助動詞之連結　九八

練習十一　一〇〇
第十章　時、法、相、意義之轉換　一〇一
練習十二　一〇二
第十一章　指定及比較之助動詞之連結　一〇四
第十二章　助動詞連結之順序　一〇六
練習十三、十四　一〇九
第十三章　用言及活用連語與助動詞之連結　一一二
練習十五　一一八
第十四章　用言之慣用語句　一二〇
練習十六　一二三
第十五章　體言與用言之關係、主語、述語、客語　一二四
練習十七、十八、十九　一二七
第十六章　主語之轉換　一二八
練習二〇、二一、二二　一三二
第十七章　補語　一三三

練習二三　一三五
附錄
活用連語表第一
活用連語表第二
第三篇　文之構造　一三七
第一章　單語連語文　一三七
第二章　文之主語述語　一三八
練習一　一四二
第三章　敍述之種類(其一以動詞爲述語)　一四三
練習二　一四七
第四章　敍述之種類(其二以形容詞或助動詞之如爲述語)　一四八
第五章　敍述之種類(其三以助詞爲述語)　一四九
練習三　一五〇
第六章　文主　一五一

練習四　一五四
第七章　文之要素之省略　一五四
練習五　一五七
第八章　修飾語之一　一五九
第九章　修飾語之二　一六一
練習六、七　一六八
第十章　單文　一七〇
練習八　一七五
第十一章　句—複文　一七八
練習九　一八四
練習十　一八五
第十二章　節—重文　一八七
練習十一　一九一
第十三章　文之性質上種類　一九二
第十四章　係結之法則　一九六

練習十二　一九八
第十五章　文之解剖　二〇〇

日本文典

第一篇　品詞之分別

第一章　白話文言與單語

白話	文言	譯文
〔一〕月が出る	月出づ	月出。
花が二つ三つ咲いた	花二つ三つ咲きたり	花開二三朶矣。
兎の耳は長い	兎の耳は長し	兎耳長。
太郎が球を投げる	太郎球を投ぐ	太郎拋球。
ボートを漕がう	ボートを漕がん	欲盪舢板。
お前の帽子は私のよ	汝の帽子は余のより	汝之帽子。較

小さい　小さし　余爲小。

樹の枝を折つてはならぬ　樹の枝を折るべからず　不可折樹枝。

以上所引諸句。不過示白話與文言之區別耳。吾人今所欲研究者。則爲文言之法則。

〔二〕月花、太郎、球、兎、耳、出づ、咲く、投ぐ、を、の、ん、ず、たり等語。謂之單語。

單語視其性質。可分爲數種。今請繼此分別言之。

第二章　名詞

〔三〕月、花、兎、ボート、球等。爲物之名。如此之語。謂之名詞。

〔四〕太郎、次郎、義經、辨慶、亞細亞、富士山、臺灣、滿洲等。爲人物山川之名。亦名詞也。

〔五〕底、蓋、表、裏等。爲物之一部之名。亦名詞也。

〔六〕里、町、間、尺、寸、貫、匁、圓、錢、釐等。爲度量之名。亦名詞也。

〔七〕風、雷、心、夢、春、夏、秋、冬等。爲無形物之名。亦名詞也。

〔八〕白、黑、赤、青、幅、丈、長さ、厚み、大きさ、熱さ、涼しさ、等。爲物之色或分量形狀性質之名。亦名詞也。

〔九〕幸福、熱心、勉强等。爲事之名。亦名詞也。

凡以之稱事物之名之語皆謂之名詞。

練習一　左列文句中何語爲名詞。請試言之。

(イ)日西に沒し月東に出づ　日沒於西。月出於東。

(ロ)牛は哺乳獸なり　牛哺乳獸也。

(ハ)豐臣秀吉は尾張國愛知郡中村人なり　豐臣秀吉。尾張國愛知郡中村人也。

(ニ) 壯年に及び獨立の生活を營むに至りて新聞紙を發行したり　及壯年營獨立之生活。發行新聞紙。

(ホ) 學を脩め業を習ひ智能を啓發し德器を成就す　脩學習業。啓發智能。成就德器。

(ヘ) 青は藍より出でて藍よりも青し　青出於藍。而青於藍。

(ト) 月落ち烏鳴きて霜天に滿つ　月落烏啼霜滿天。

(チ) 心に驕なきときは人を敬ふ心に迷なきときは人を咎めず　心無驕則敬人。心無迷則不咎人。

第三章　代名詞

〔一〇〕「汝の帽子は余のよりも小さし」之汝、余等。以之代姓名用者。謂之代名詞。

〔一一〕私、僕、余輩、君、先生、貴君、足下、閣下等。爲代姓名用者。故曰代名詞。

〔一二〕これ、それ、かれ、何、これら、それら等。以之代某物某事用者。亦稱代名詞。

〔一三〕こゝ、そこ、あすこ、かしこ、何處等。爲指示地方用者。亦代名詞也。

〔一四〕こち、そち、こちら、あちら等。爲指示方向用者。亦代名詞也。

凡以之代事物名稱之語皆謂之代名詞。

練習二　左列文句中何語爲代名詞。請試言之。

(イ)　己の欲せざることは人　己所不欲。勿施於人。

に施すこと勿れ

(ロ) 己の長をいふこと勿れ　勿言己之長。

(ハ) これも一時かれも一時　此一時。彼一時。

(ニ) こゝかしこの見物に半日を費せり　游覽此處彼處。己費半日。

(ホ) 人は二人の主に事ふること能はずこれを惡み彼を愛しこれを親み彼を疎んずべければなり　人不能事二主。以惡此愛彼親此疎彼故也。

(ヘ) 誰か鳥の雌雄を知らん　誰知鳥之雌雄。

(ト) いづれの國にも皆その國のしるしの旗ありと　無論何國。皆有國旗。此日章旗。卽日本國之徽章也。

の日の丸の旗は日本國
のしるしなり

第四章　數詞

〔一五〕「花二つ三つ咲きたり」之二つ、三つ。爲表物之數之語。五つ、六つ、七つ、八つ、九つ十、二十、百、千、萬、億、若干、幾何、數多等。凡表物之數之語。皆爲數詞。

〔一六〕第一、第二、第三、第四、一つ目、二つ目、三つ目、第一號、第二號、第三號等。乃以數示事物之順序者。亦數詞也。

〔一七〕雞一羽、長持一棹、家五軒、大礮八門、彈丸一千發之羽、棹、軒、門、發等。皆爲數數用者。猶之言一つ二つ也。又如屏風一雙。麥酒一打。乃總合一以上之多數而顯之者。亦數詞也。

〔一八〕酒一合、鯨尺一寸、金拾五錢、午前十一時二十分之合、寸、錢、時、

分等。乃名詞而以數詞加於其上用者。

以數詞加於名詞之上用者頗多。

表事物之數或數之順序者謂之數詞。

練習三　左列文句中何語爲數詞。請試言之。

(イ)　六時より九時まで讀書　自六時至九時讀書。十時就寢。

し十時眠に就く

(ロ)　一册の定價十二錢五釐　一册定價十二錢五釐。

なり

(ハ)　習慣は第二の天性なり　習慣乃第二之天性。

(ニ)　在位二十五年四十八歲　在位二十五年。四十八歲禪位

にて位を皇太子に讓り　於皇太子。

給ふ

(ホ)　地球より太陽までの距離は一億四千八百四十五萬四千基洛米突にして太陽の容積は地球の百二十八萬倍なり

地球與太陽之距離。爲一億四千八百十五萬四千啟羅邁當。太陽之容積。爲地球之百二十八萬倍。

名詞、代名詞、數詞。之三者總稱之爲體言。

練習四　左列文句中。何者爲體言。請試言之。

(イ)　加藤清正は世に名高き賤岳七本槍の一人なり

加藤清正者。名聞於世之賤岳七槍士之一人也。

(ロ)　余の姉は十六歳にて余より二つの年上なり

余姉十六歳。長我二年。

(ハ)　富士山は海面を拔くこと

富士山高於海面一萬三千尺。

と一萬三千尺なり

(ニ) 三種の神器は何々ぞ　何謂三種神器。

(ホ) 十二に八を乘じて六にて除せば其答幾何なるか　以八乘十二。以六除之。其答數幾何。

(ヘ) 十一隻の軍艦は舳艫相銜みて旅順港口に達を　十一隻之軍艦。舳艫相銜。至旅順港口。

(ト) 横須賀吳佐世保舞鶴は我國の軍港なり　横須賀吳佐世保舞鶴。乃我國之軍港也。

第五章　形容詞

〔一九〕「兎の耳長し」「汝は余より小し」「三つより多し」之長し小し多し。皆爲形容耳、汝、三つ之語。如是之語。謂之形容詞。

〔三〇〕長し短し細し太し輕し重し高し低し等。爲形容事物分量之形容詞。

〔三一〕赤し黑し白し青し等。爲形容事物彩色之形容詞。

〔三二〕汚し美し甘し醜し賤し貴し等。爲形容事物性質之形容詞。

〔三三〕「耳長し」「價の高き店」「之長し高き。則置於體言之下。以形容之。「長き耳」「高き山」之長き高き。則置於體言之上。以形容之。

(注意)如言「足の長き犬」與「犬の長き足。須分別觀之。置於體言之上或下。以形容體言之語。謂之形容詞。

(注意)此爲形容詞之一種。別有形容動詞者。詳見後章。

練習五

(イ) 水清ければ魚すまず　水清則魚不棲。

(ロ) 良藥は口に苦し　良藥苦口。

(ハ) 死は鴻毛よりも輕く義は泰山よりも重し　死輕於鴻毛。義重於泰山。

(ニ) 父母の恩は山よりも高く、海よりも深し　父母之恩。高於山。深於海。

(ホ) 時計の短き針は時を示し長き針は分を示す　時鐘之短針示時。長針示分。

(ヘ) 十六の三倍は六の八倍に等し　十六之三倍。等於六之八倍。

(ト) 鳧の脚短しといへども之を繼かば悲むすし鶴の脛長しといへども之を絶たば憂ふべし　鳧之脚雖短。續之則可悲。鶴之脛雖長。斷之則可憂。

第六章　動詞

〔三四〕「月出づ」「花二つ三つ咲く」「太郎書を讀む」之出づ咲く讀む。皆表示動作之語。如是之語。謂之動詞。

〔三五〕「茲に人有り」「宮城は東京に在り」之有り在り。乃表示存在者。亦動詞也。

動詞。乃。表。示。事。物。之。動。作。或。存。在。之。語。也。

練習六　左列文句中之動詞。請試言之。

(イ)　爾に出でたるものは爾にかへる　出乎爾者返乎爾。

(ロ)　夫婦相愛し朋友相信ず　夫婦相愛。朋友相信。

(ハ)　幹事は會長の指揮を受けて庶務を整理す　幹事受會長之指揮。而整理庶務。

(ニ) 蠶は絲を吐き蜂は蜜を釀す　蠶吐絲。蜂釀蜜。

(ホ) 山に登り川を渡る　登山渡河。

(ヘ) 亂を治むるは猶醫病を治むるが如し　治亂猶醫之治病。

(ト) わが思ふ人はありやなりや　我所思之人。有乎無乎。

有あり爲動詞。而無なし爲形容詞。欲知此區別。則不可不先知動詞形容詞之活用。

第七章　動詞之活用

〔三六〕太郎は讀まず　太郎不讀。

次郎は讀みなり　次郎已讀。

三郎も讀むか　三郎亦讀乎。

四郎は讀めども五郎は讀まず　四郎雖讀。而五郎不讀。

觀右例。可知動詞之語形。有種種變化。此之謂動詞之活用。

〔三七〕太郎は起きず　太郎不起。

次郎は起きなり　次郎已起。

三郎も起くるか　三郎亦起乎。

四郎は起くれども五郎は起きず　四郎雖起。而五郎不起。

右以起く易讀む。其活用之形狀。則與讀ム異。以動詞活用之種類頗多故也。今請說明如次。

其一　四段活用　良行變格活用　奈行變格活用

〔二八〕

讀　まみむめも

取　らりるれろ

如右列讀む取る。係五十音之四段活用者。謂之四段活用動詞。四段活用動詞頗多。在か行活用者。謂之加行四段活用。在さ行活用者。謂之左行四段活用。視其活用屬於何行。即稱爲何行之四段活用。他動詞準此。

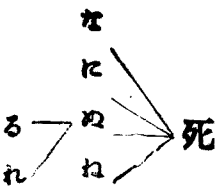
〔二九〕「讀まず」「取らず」「食はず」「飲まず」等四段活用動詞。欲與ず連接。以表示打消之意。則常用あ列之音。

〔三〇〕有り、居り作打消之時。亦爲「有らず」「居らず」。但觀其活用之形。與ら行四段活用。初無以異。請觀左表。

雖然。四段活用動詞之「取る」。不得以「取り」用於句末。而「有り」則可以「有り」結之。例如「茲に人あり」是。此卽二者所以不同之點也。

有り、居り。謂之良行變格活用動詞。

〔三〕「死ぬ」字之打消。則爲「死なず」。其以あ列而連於ず。則與四段活用同。但可作爲「死ぬる人」「死ぬれば」。其活用之形。多於四段活用者二。請觀左表卽知之。



死ぬ謂之奈行變格活用。

注意　(一)　四段活用動詞。文言與白話。其活用初無以相異。良行變格、奈行變格動詞。在白話。其活用則全與四段活用同。

(二)　奈行變格、良行變格動詞。爲現今最通用者。只有右列三語。其他動詞之以ぁ列連於ず者。皆四段活用也。

練習七　請言左列動詞之活用。

書く　保つ　打つ　滅す　起す　言ふ　願ふ　編む　賣る

其二　上二段活用　上一段活用

(三)　猿木より落ちたり　猿已自樹墮矣。

猿木より落つ　猿墮自樹。

猿も木より落つることあり　猿亦有自樹墮者。

猿木より落つれば……　猿自樹墮則……

落 ＝ たちつてと／るれ

右列動詞。活用於「い」「う」二列。復加「る」「れ」於其「う」列之音。此乃於五十音之行中。而活用於上二段者。故謂之上二段活用。

〔三三〕落ちず　强ひず　悔いず

右列之上二段活用。如表示打消之意。則常以「い」列與ず連接。

〔三四〕射る鑄る著る煮る似る干る見る惟みる鑑みる居る用ゐる率ゐる等十二語。亦用「い」列與ず連接。以表示打消者。與上二段同。但此等祇有「い」列之音。而不活用於う列。其活用法如左。

射。……やいゆいよ　る　れ

煮。……にぬねの　る　れ

故謂之上一段活用動詞。

注意　(一)　上二段活用動詞。除某地方外。其在白話。則轉成上一段活用。

(二)　上一段活用之動詞中。普通用者。祇有上列之十二語。其他動詞之以「い」列與ず直接。爲打消者。皆爲上二段活用。

(三) 在某處。「い」列之音與「ゐ」列之音。亦甚易於相混。務當注意。

練習八 請言左列動詞之活用。

見る　坐く　報ゆ　强ふ　吸ふ　入る　射る　煮る

着る　斬る　起く　置く

練習九 左列文句中動詞。其活用之種類。請詳言之。

(イ) 老を敬ひ幼をいつくし　敬老慈幼。

み有德を貴び無能をあ　貴有德。憐無能。

はれむ

(ロ) 忠言は耳にさかひ良藥　忠言逆耳。良藥苦口。

は口に苦し

(ハ) 過ぎたるはなほ及ばざ　過猶不及。

るが如し

(ニ) 昔は東海道を行くに十二三日を費しなり　昔者往東海道。費十二三日。

(ホ) 彈丸雨の如く飛び來れども平然として各自の職務に從ふ　雖彈丸如雨。亦視爲無事。各從其職務。

(ヘ) 人生五十功なきを耻づ　人生五十耻無功。

(ト) 浦嶌太郎龜に乘りて龍宮に遊ふ　浦嶌太郎乘龜遊於龍宮。

(チ) 少年老い易く學成り難し　少年易老學難成。

(リ) 日光水に入りてこの花　日光入水反照此花園之時。其

園を照すときは之の光　光燦爛如虹。
燦爛として虹の如し

其三　下二段活用　下一段活用

〔三五〕人を譽めず　不譽人。
人を譽む　譽人。
人を譽むれることあり　譽人。
人を譽むれば……　譽人則……

觀右例。卽知其酷似上二段活用矣。

但其第一變化。無「い」列之音。而有「ロ」列之音。今以表示之則如左。

譽
まみむめも
—
—
るれ

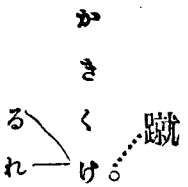
如此活用於「ゐ」「う」二列。復加「る」「れ」於「う」列者。謂之下二段活用。

〔三六〕痩せず　受けず　止めず　變へず

如右列之下二段活用動詞。與打消之ず連。則常有「ゐ」列之音。此亦不可不知者。

〔三七〕動詞之蹴る。不活用於「く」。其可活用者。祇有「け」「ける」「けれ」三式耳。

故謂之下一段活用。



注意　(一)　下一段動詞。祇有蹴る之一語而已。

(二)　下二段活用動詞。除某處外。在白話。其活用與下一段同。

練習十　請將左列動詞活用之。

枯る　刈る　兼ぬ　死ぬ　瘦す　受く　浮く　消
越ゆ　諫む　納む　尋ぬ　恐る　始む　始る　流る
流す　分く　分つ

練習十一　請將左列文句中之動詞摘出。而言其活用。

(イ)　白日山に依りて盡き黃　白日依山盡。黃河入海流。
河海に入りて流る

(ロ)　天は自ら助くるものを　天助自助者。
助く

(ハ)　秋高く馬肥えたり　秋高馬肥。

(ニ)　己を責めて人を責めざれば恐なし　責己而不責人則無恐。

(ホ)　敵將を仆さんと思ふものは先づ其馬を射る　欲仆敵將者。則先射其馬。

(ヘ)　心こゝに在らざれば聽けども聞ゐず視れども見ゐず食へども其味を知らず　心不在焉。雖聽不聞。雖視不見。雖食不知其味。

(ト)　往くものは追はず、來るものは拒まず　往者不追。來者不拒。

(チ)　鶯は幽谷を出でゝ喬木に遷る　鶯出幽谷。而遷於喬木。

（ヶ）學年は毎年四月に始まりて翌年の三月に終る　學年以毎年四月始。翌年三月終。

其四　左行變格活用　加行變格活用

〔三八〕勉强せず　不用功。

勉强したり　己用功。

勉强す　用功。

勉强する時　用功之時。

勉强すれば……　用功則……

勉强
さし
す
せ
そ
る
れ

觀右例。可知其與下二段活用頗相似。打消時之有「ぬ」列之音亦相同。惟「勉强したり」可活用於し。此則下二段所無者。下二段活用有四式。而此則有五式。故謂之左行變格動詞。

〔三九〕左行變格動詞。祇有す（爲）之一語耳。但由外國語轉爲日本語之動詞。則常加す於其下活用之。故來自漢語之動詞。皆依此活用。在今日已成爲必要之動詞矣。

〔四〇〕歎ず　論ず　變ず　討ず　講ず

如右列漢語之撥音。或長音。大抵爲「ざ」行活用。但漢語之爲二字以上。如「感歎す」「議論す」「輪講す」等。則仍用清音。

〔四一〕如「詳にす」「明にす」「辱くす」「德とす」。由他語作此活用者亦頗多。

〔四二〕惟「來」之一語。作打消時。則爲こず。有「お」列之音。其活用如

左。

來　かきくけこ／れ

來謂之加行變格活用動詞。

練習十二　請言左列動詞之活用。

出發す　運動す　信ず　歎息す、

依以上所學。知動詞視其活用。可分爲九種如左。

動詞
- 四段活用
- 上二段活用
- 下二段活用

活用
- 上一段活用(十二語)
- 下一段活用(一語)
- 左行變格活用(除來自漢語及他語者外祇有一語)
- 加行變格活用(一語)
- 奈行變格活用(一語)
- 良行變格活用(一語)

(注意)　上一段以下之動詞。其數甚少。須記憶之。

練習十三　請就左列文句。區別動詞之活用。

(イ)　千里の馬も老いては駑馬に劣る　雖千里馬。既老則劣於駑馬。

(ロ)　衆多く其議に應ず右大　衆多贊成其議。右大臣巖倉具

臣巖倉具視獨り之を不可とす

視獨以爲不可。

太古に在りては人皆洞穴の中に住み石の道具を用ゐて種々の物を造り之れより少く進みては樹木の枝などを結付けて屋根とし或は太き樹を地に立てゝ其上を獸皮にて蓋び粗陋の小屋を作りたり

在太古時代。人皆住於洞穴之中。用石器製種種之物。厥後稍進。則結樹爲屋。或立巨木於地。張獸皮於其上以作粗陋小屋。

(二)

近來に至り古物を研究

至近時研究古物之學問大進

する學問大に進歩したり之によりて研究するときはよく古代人民の有樣を知ることを得

歩。依此研究之。能知古代人民之狀態。

第八章　形容詞之活用 附形容動詞

〔四三〕水清。く。流る　水清且流。

川の水清。し。　川之水清。

清。き。水に嗽ぐ　嗽於清流。

水清ければ魚すまず　水清則魚不棲。

形容詞語尾。亦可活用。觀右例卽知之。惟其活用跨於か行さ行二行。非若動詞之專屬於五十音之一行者。

さしすせそ

清 かきくけこ

れ

〔四四〕形容詞之活用。祇有一種。又皆活用於く、し、き、けれ四式。但在く、き、けれ之活用。其上有加「し」爲しく、しき、しけれ者。如在(2)之時。則不疊用之。

	惡	惡	惡	惡
	し	し	し	し
			け	
(1)	く	○	き	れ
(2)				
(3)				
(4)				

（注意）在口語(2)(3)之活用。則轉爲い。

〔四五〕凡形容詞。以第一段「く」之活用格。連於動詞之あり。作爲

（善）よからよかりよかるよかれ

（惡）あしからあしかりあしかるあしかれ

活用者。謂之形容動詞。

〔四六〕「詳に」「明に」「立派に」「慨然と」「滔々と」等。以にと連於あり。變爲「詳なり」「明なり」「立派なり」「慨然たり」「滔々たり」者。亦形容動詞也。

（注意）（一）形容動詞之活用。同良行變格。

（二）附於體言之上或下。同普通之形容詞。

（三）與「富士山なり」「我志なり等。以名詞續於なり者。不可混而爲一。

練習十四　請將左列文句中之形容動詞摘出。言明係形容何語者。

(イ)物盛なれば必ず衰ふ　物盛則必衰。

(ロ)池中の魚は河海の大なるを知らず　池中之魚。不知河海之大。

(ハ)四面皆山にして通路の不便少からず　四面皆山。而通路之不便實甚。

(ニ)この圖は精密なれども正確なりといふを得ず　此圖雖精密。然不得謂之正確。

(ホ)眞に勇猛の士に非ずや　非眞勇猛之士乎。

形容詞(形容動詞)動詞。總稱之爲用言。

第九章　助動詞及其活用

〔四七〕太郎は書を讀まず　太郎不讀書。
次郎は書を讀みたり　次郎讀書。

右のず、たり。乃附於動詞之下。以助其作用之語。如此之語。謂之助動詞。

〔四八〕助動詞視其意義。可分爲數種。今將其最普通者。列之於左。

(1)行かず、行かざるなり之「ず」「ざる」。爲示打消之助動詞。

(2)打たる、捨てらる之「る」「らる」。爲受身之助動詞。

(3)打たす、捨てさす、打たしむ之「す」「さす」「しむ」。爲使役之助動詞。

(4)行きたり、行けり、行きき、行かん之「たり」「り」「き」「ん」爲時之助動詞。

(5)行くべし之「べし」。行くまじ之「まじ」。爲推量之助動詞。べ

し有時示命令或能力。如以べし續於ぁり。亦爲助動詞。謂之べかり。

(6)行くなり、花なり、將軍たり、之「なり」「たり」。爲指定之助動詞。

(7)行く如し、花の如し之「如し」。爲比較之助動詞。

〔四九〕右列中(6)之なり。附於名詞及形容詞。(7)之如し。附於動詞及助詞のが之下。其他皆附於動詞形容詞或他助動詞之下者。助動詞除一二種外皆爲附於動詞形容動詞及他助動詞之下。以助動詞活用之語助動詞亦有活用。

〔五〇〕る、らる(受身)す、さす、しむ(使役)之五者。其活用同下二段活用之動詞。

(一)れ　る、　るれ
(二)られ　らる　らる、　らるれ
(三)せ　す　する　すれ
(四)させ　さす　さする　さすれ
(五)しめ　しむ　しむる　しむれ

〔五一〕なり(指定)たり(時、指定)り(時)べかり(能力)之活用。同良行變格活用。

(一)なら　なり　なる　なれ
(二)たら　たり　たる　たれ
(三)ら　り　る　れ
(四)べから　べかり　べかる　べかれ

〔五二〕べし(推量、命令、能力)まじ(推量)之活用。同形容詞。如し大抵亦

相同。

(一) べく　べし　べき　べげれ

(二) まじく　まじ　まじき　まじけれ

(三) 如く　如し　如き

〔五三〕ん(時)可變爲んめ二式。

ん　め

〔五四〕き(時)ず(打消)之活用。凡三式如左。

(一) き　し　しか

(二) ず　ぬ　ね

(注意)右之活用表中。有□者。惟古文中用之。

練習十五　請將左列文句中之助動詞摘出。

(イ) 學は疑ふにあらざれば　學非疑則不明。

明ならず

(ロ) かくの如くば書を讀むとも何の益あらん　如此雖讀書亦何益之有。

(ハ) 午前八時登校すべし　午前八時當登校。

(ニ) 露の敗兵は一旦港内に逃れしが更に逃れて陸上に行きたり　俄國敗兵。既逃入港内。復逃而登岸。

(ホ) 面あたり礮煙彈雨の大活劇を目擊する思あらしむ　使有目擊礮煙彈雨之大活劇。演於目前之思。

(ヘ) 奈良は元明天皇以後七代七十餘年間の帝都たり　奈良爲元明天皇以後七代七十餘年間之帝都。

第十章　副詞

〔五五〕人口最も多し　人口最多

甚だ狹き路　甚狹之路

正に其業を卒へたり　正卒業

よく飲みよく食ふ　善飲善飯

遙に富士山を望む　遙望富士山

如右列中之最も、遙に、甚だ、正に、よく。(善)皆副於種種動詞及形容詞。以限定其意義者。如此之語。謂之副詞。

〔五六〕副詞之中如今、しばし(暫)嘗て、既に、現に、遂に、久久等。則爲表示時間之意義者。

〔五七〕如茲に、何處に等。則爲表示場所之意義者。

〔五八〕如纔に、半、殆ど、甚だ、全く等。則爲表示分量程度者。

〔五九〕如必、豈、亦、慥に、焉ぞ、恐らくは、願はくは等。則爲表示斷定推

量願望等意義者。

〔六〇〕帽子を輕く打る　輕打帽子。

如右之形容詞。以く之形。轉爲副詞者甚多。又可以作爲形容動詞之形。作爲副詞用。例如突然に行く。自然と育っ等是。如欲區別形容詞與副詞。當注意於形容體言與形容用言。

〔六一〕如極めて大なり。決して聞かず。卽用動詞爲副詞者。

〔六二〕いと靜にゆく甚だ熱心に。

如右之いと甚だ。卽限定副詞之靜に熱心に者可知副詞不僅限定形容詞及動詞。又能限定他副詞。

副詞乃副於用言(動詞形容詞)或副詞以限定其意義之語也。

練習十六　請將左列文句中之副詞摘出。言明其限定何語。

(イ)　雄雞は常に怒り易くし　雄雞乃易怒而好鬬者。

て鬪を好む者なり

(ロ) 互ひ善を責むるは朋友の道なり　互相責善。乃朋友之道也。

(ハ) 弓馬の技皆その蘊奥を極む　弓馬之技。皆極其蘊奥。

(ニ) それ然り豈それ然らんや　其然豈其然乎。

(ホ) 王何ぞ必ずしも利をいはん惟仁義あるのみ　王何必曰利。亦有仁義而已矣。

(ヘ) 曾て之を憂へしに今果して然り　向已憂之。今果如此。

練習十七　請以適當之副詞。塡入左列文句中之空處。

(イ) 圍を受くること八月城○○陷る　受圍八月城○○陷。

(ロ) 一たび決心したるゝは○○成し遂ぐべし　已決行之事。○當完成之。

(ハ) 港と稱する處には○○波止場のあらざるなし　稱爲港之處。○無不有碼頭。

(ニ) 鐵道を架設したれば兩地の往復○○便利なり　已架設鐵格。故兩地之往來○便利。

(ホ) 理學を研究して○○其名を著す　研究理學。而○揚其名。

(ヘ) これより後外國船艦の往來するもの○○多し　爾後外國船艦之往來者○多。

(ト) 恩賜の御衣今○○在り　恩賜之御衣今○在焉。

第十一章　接續詞

〔六三〕月又。花　月又花。

毛筆或は鉛筆にて認むべし　須以毛筆或鉛筆寫之。

長くして且つ廣し　長且廣。

右列文句中之又或は且。爲連結語句之語。如此之語。謂之接續詞。

〔六四〕「御話申上度候間」「久しく留學中の處」「之を知らずと雖等之間處雖。乃附屬於句末。不能分離之接續詞也。

〔六五〕「秦か漢かはた近代か」「月又花」之はた(將)又。此外如並に而して、然るに、然れども等。句中雖不用之。於文之意義亦無甚差異。

練習十八　請將左列文句中之接續詞摘出。

(イ) 學びて而して時に之を習ふ亦樂しからずや

學而時習之。不亦樂乎。

(ロ) 濠太利亞の天產物中動物及び植物は奇異なる種類に富むと雖も經濟上有用なるもの極めて少し

濠太利亞之天產物中。動物及植物。雖富於奇異之種類。然經濟上有用者極少。

(ハ) 賴山陽名は襄字は子成山陽と號す又三十六峯外史の別號あり

賴山陽名襄。字子成。號山陽。又別號三十六峯外史。

(ニ) 詩文を以て名あり然れども其心を用ゐたるは

以詩文有名。然其最用心者。經濟之學也。

經濟の學なり

第十二章　感動詞

〔六六〕あな恐しせ　　呀可畏哉。

あはれ一生の思出に……　　噫一生之志……

嗚呼悲しいかな　　嗚呼悲哉。

此あな、あはれ、嗚呼等。乃感動之時。出其不意而發者。如此之語。謂之感動詞。

第十三章　助詞

〔六七〕樹の枝　わが心　球を投ぐ　人に與ふ　三つより多し

西へ行く

右例中之の、が、を、に、より、へ。乃附於各語之下。以示與他語之關係者。如此之語。謂之助詞。

〔六八〕書を讀めども　書を讀めば　書を讀むとも

如右之ども、ば、とも等。祇能附於用言之下。不能附於體言之下。

〔六九〕助詞之種類頗多。

(甲)「人か鬼か」「誰かある」「いふかいはぬか」「人や先われや先」「ありやしなや」之か、せ。爲疑問助詞。

(乙)「豈圖らんや」「誰か之を信ぜんや」之や及「面白き月かな」「月を見るかな」之かな。爲感動助詞。

(丙)「月と花と」「見ると聞くとは大なる相違なり」「四郎は讀めどと五郎は讀まず」之と、とも等。則爲接續助詞。

此外尙有數種。

(注意)助詞乃由其形分別之品詞之名。如由其功用而言。則往往有同接續詞感動詞者。

助詞。乃。附。於。種。種。品。詞。之。下。以示。與。他。品。詞。之。關。係。或助。其。作。用。之。語。也。

第十四章　十品詞及品詞之轉成

〔七〇〕依以上所學。知日本語分爲名詞、代名詞、數詞、形容詞、動詞、助動詞、副詞、接續詞、感動詞、助詞、等十種。又知其語尾有活用者。有不活用者。尙當知體言與用言之區別。

〔七一〕名詞以下十種詞。謂之品詞。其分爲十品詞。亦無非爲便於說明文法耳。然其間自有相互之關係。不可不知之。例如

(1) 光、霞、帶、笑、思等。卽由動詞轉成名詞。

(2) 僕、君、小生等。卽由名詞轉成代名詞。

(3) 大人ぶる、蟲ばむ、嵩む等。卽由名詞轉成動詞。

(4) 全くす、辱くす、重くす、一にす等。卽由形容詞或數詞。轉成

動詞。

(5) 誠に、常にと、に(茲)、決して、以て等。卽由名詞代名詞、動詞或形容詞。轉成副詞。

(6) 如あはれ。卽以名詞爲感動詞。

(7) 如扨、また等。有時爲副詞。有時則爲接續詞。

練習十九　請將左列文句中之品詞分別言之。

(イ) 人生れて二十より三十に至るまでは方に出づる日の如し四十より六十に至るまでは日中の日の如し盛德大業との時期にあり

人生自二十至三十。如日之方出。自四十至六十。如日中之日。盛德大業之成。皆在此時期。

(ロ)

清麿還りて奏して曰く我國開闢よりこの方君臣の分自ら定まれり天日嗣は必ず皇統を立つべし敢て非望を抱くものは速に誅戮を加ふべしと

清麿還奏曰。我國自開闢以來。君臣之分已定。天儲必當立爲皇統。如有敢抱非望者。當速行誅戮之。

(ハ)

父母や我を生み我を養ひ我を長ぜしめ我を教ふこれ無上の厚恩何の日にか之を忘れん

父母生我養我。長我教我。此無上之厚恩。無日能忘之。

附錄

音便及假名用法之概要

其一　音便

〔一〕

(1)
飛びて　飛んで
讀みて　讀んで
死にて　死んで

(2)
勝ちて　勝つて
取りて　取つて
食ひて　食つて

(3)
問ひて　問うて

(4)
書きて　書いて

指して　　指いて

動詞語尾之與て或たり連續者。如(1)之び、み、に。則轉成撥音ん。如(2)之ち、り、ひ。則轉成促音っ如(3)之ひ。則轉成長音う。如(4)之き、し。則轉成母音い。

此等皆由發音之便而生者。謂之動詞之音便。

〔三〕悲しきかな　悲しいかな　之を久しくす　之を久しうす

如右列之形容詞活用之き、く。亦有時因音便轉成うい者。

〔三〕朔　つき。たち　ついたち

商人　あきびと　あきうど

手水(洗手之水)　てみづ　てうづ

如右列之名詞。亦有以音便轉成いう者。

音便卽因轉音。並假名亦變之之謂。

其二　假名用法

〔四〕燈消ゐたり　草を植ゑたり　困難に堪へよ

ゐゑへ三假名。其發音雖同。寫法則不可無區別。蓋發音變而假名尙未變也。區別同音之語書之。謂之假名用法。

（い音）過を悔いよ　兵を率ゐて進む　學校に通ひたり

（う音）松の木を植う。憂ふること勿れ

（ゐ音）國榮ゐん　民飢ゑたり　字を習へ。

右之假名用法。如能將動詞活用熟記。便可無誤。例如動詞悔ゆ打消爲悔いず。便知悔ゆ爲上二段活用。知悔ゆ活用於や行。則悔之語尾。當作悔い。不得作悔ひ悔ゐ等一。切動詞之活用。皆在一行之中。故知其一其他便用以類推矣。例如知通ひたり之活用於ひ。卽可作爲通は、ひ、ふ、へ矣。

〔五〕笑う。て答へず
天を仰いて歎ず
來駕を辱う。す
右列之語。皆音便也。笑ふ本爲は行動詞。但在て(或たり)之上。則依音便轉爲う。故當用う。不得誤書爲笑うて。
〔六〕その行に恥ぢよ　山に攀づ。　感じたり　信ずべからず
除由漢語而來之さ行變格動詞外。凡動詞活用之假名。皆爲ぢづ。
〔七〕規則を變ふ。　風俗變はる　十三に二を加ふ。　寒氣日に加はる　賞典を羣臣に賜ふ。　賞典を賜はる　主意合ふ。
時計を合はす　蝶舞ふ。　樂を舞はす
知變ふ加ふ賜ふ合ふ舞ふ等動詞。活用於は行。便知由此而出之「變はる」「加はる」「賜はる」「合はす」「舞はす」等亦動詞。其

語尾之假名。當作は矣。

〔八〕病を愈。やす　病愈。にたり

田を肥。やす　田肥。にたり

錢を費。やす　錢多く費。にたり

如右列やす之能爲動詞。以其本動詞爲や行活用故也。

〔九〕願　ねがひ。　煩　わづらひ。　占うらなひ。

謠　うたひ。　戰　たたかひ。

老　おい。　悔　くい。　報むくい。

榮　さかひ。　費　つひに。

耻　はぢ。

知以上名詞之假名。亦猶之動詞之活用。便可無誤矣。

〔一〇〕鏃　せじり。(矢、尻)　眦　まなじり。(目の後)

諺　ことわざ(言、業)　所行　しわざ(仕、業)

基　もとゐ(本、居)　鳥居　とりゐ

祖父　おほぢ(大、父)　伯叔父　をぢ(小、父)

弦　ゆみづる(弓、弦)　鍋弦　なべづる

如右列之複合語假名用法。就其原語意義攷之。便可瞭然矣。

(二)上　う　上塗　うはぬり

複合語之變其音韻者。亦不能轉於本行之外。此亦不可不知之。

(三)耻(名詞)　耻づ(動詞)　耻づかし(形容詞)

男(名詞)　をゝし(形容詞)

如知一品詞之假名用法。則有相互關係之他品詞之假名用法。亦不難知之矣。

(三)鱸　すゞき　硯　すゞり　雀　すゞめ　鼓　つゞみ

葛籠 つゞら　綴 つゞれ　續く つゞく

始右例疊音之下。則必用同字之濁音。此亦不可不知者。和文之假名用法中。所當注意者。大略如右。此外除每字研究之。亦初無他法。

〔一四〕字音之假名用法。例如同一長音之おー。則有あう、おう、あふ、おふ等寫法。如欲一一熟記之。亦殊覺其難。

近文部省頒行之小學校施行規則。則有以おー爲長音符號之規定。古來之字音假名用法。所當留意者。則有數項如左。

水 スイ　唯 ユイ　對 タイ　愛 アイ　兄 ケイ　明 メイ

如在有う列之音之漢字之下。而有ひ之音者。則悉改爲ゐ。又在あ列ゐ列之下。而有い之音。則常用い。

〔一五〕生 セイ　平 ヘイ　丁 テイ　明 メイ

如在含有よー ゐー 二音之漢字。よー之發音。則常用せう。

〔一六〕やう　肖　宵　霄　消　銷　逍　稍　梢

しよう　鍾　鐘　衝

如就右列漢字之形式觀之。同一形式之漢字。大抵亦用同一之假名。

〔一七〕攝（セツ）合併（カイヘイ）甲冑（カイチウ）急度（キツト）雜誌（ザツシ）拾把（ジツパ）

如右列之有時爲っ之音者。或與他字疊爲促音者。作爲長音之時。則常用ふ。

除以上所言各種注意之法外。尙當字字研究之。

練習　請將假名之誤用者更正之。

（イ）父母は我を生み我を養う　父母生我畜我。

（ロ）勳章を賜わる　賜勳章。

(イ) 恩を受けては必ず報ひよ　受恩則必報。

(ロ) 老ひては子に從ふ　老則從子。

(ハ) 戸を閉じよ　當閉戸。

(ニ) その行感づるに堪ゐたり　其行可感。

(ホ) 賞を辱ふす　辱賞。

(ヘ) 視れども見へず　雖視不見。

(ト) 食ゐどもその味を知らず　食而不知其味。

(チ) 天勾踐を空しふする勿れ　天勿空勾踐。

(ル) 知らざることは人に問うべし　不知之事當問人。

(ラ) 礮聲十里の外まで聞たり　礮聲聞於十里之外。

(ワ) 君を思ふて眠らず　思君無寐。

(カ) 昨日某君を訪ふたり　昨日訪某君。

(ヨ) 學力衆に抽んず　學力優於衆。

(タ) 雪未だ消えず　雪尚未消。

(レ) 寒氣日に加わる　寒氣日加。

(ソ) 嗚呼悲しひかな　嗚呼悲哉。

(ツ) 城遂におちゐる　城遂陷。

(ネ) 產物年々殖えたり　產物年年增加。

(ナ)教師のをしゐに背くな　勿背教師之教。

(ラ)祝ゐ祝ゐ今日の佳節　樂哉今日之佳節。

(ム)心配に堪ゐず　不勝憂慮。

(ウ)風絶へず吹く　風吹不絶。

(井)國のさかへ　邦家之光。

(ノ)つずまやかにす　節約行之。

(オ)ちりじりになる　四散。

(ク)大ひに敵を破る　大破敵。

(セ)君と僕とはおなひ年　君與僕同年。

(マ)ちじみ　縮。

(ヤ)すづし　涼。

(フ)しぢみ　蜆。

(ユ) ほうりつゝとんりう　法律建立。

(エ) のうふ　納付。

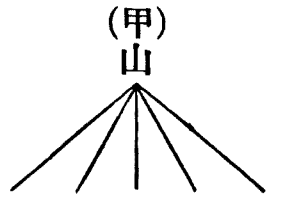
(ヲ) いしづき　礎。

(ア) うゑき　植木。

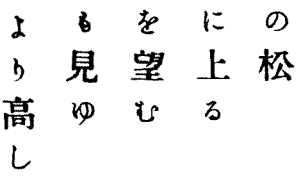
第二篇　品詞相互之關係

第一章　體言與助詞之連結

〔一〕



松　山之松
上る　登山
望む　看山
見ゆ　山亦見矣
高し　高於山



看山
看月
看花
看汝
見有三焉

體言無語尾之活用。第一篇已言之矣。依右例之甲。可知一體言能與種種助詞連續。依右例之乙。又知此等助詞。初非體言之活用。不問何體言。欲示同一之關係。皆可用同一之助詞。

〔二〕(1)(の)　樹の枝　三つの柿　汝の母

(2)(が)　我が家　三が一　君が代　君が歸るを送れば

(3)(を)　書を讀む　文を作る　五つを與ふ

(4)(に)　先生に問ふ　汝に與へん　二つに割る　六時に起く

(5)(へ)　東京へ行く　諸方へ通知す　前へ進む

(6)(より)　六時より始まる　獨逸より歸る　山より高し

(7)(まで)　九時まで勉強す　神戸まで行く

(8)(と)　酒と煙草とは衞生に害あり　三と二とを合すれば五となる

助詞有示體言與體言之關係者。有示體言與用言之關係者。

以上所列助詞。皆最普通者。卽日常白話亦用之。

此等助詞。有當注意者如左。

〔三〕太郎球を投ぐ(文言)　太郎が球を投げる(白話)

人枝を折る(文言)　人が枝を折る(白話)

口語所用之「が」在文言則全略之。但白話句末有の者。在文言則仍用の。或用が。其例如左。

人が汝を愛するのを知らない(白話)　不知人之愛汝。

人の汝を愛するを知らず(文言)

君が歸るのを送れば(白話)　送君之歸。則……

君が歸るを送れば(文言)

其下有體言者同。舉例如左。

君が歸りし日　君歸之日。

〔四〕東京に在り(在東京)　東京へ行く(往東京)

日西に沒す(日沒於西)　船西へ行く(船西向而行)

に不問時間與地方。概爲示一定之地點用。へ則爲示方向用。但在白話則混用之。無所分別。

〔五〕漢書と史記の列傳とを讀む　讀漢書與史記之列傳。

漢書と史記との列傳を讀む　讀漢書與史記之列傳。

と爲列數事物之助詞。故一體言之下。必用一と。觀右例卽知其異同之處。惟在白話。則多將其下之と略之。

〔六〕(1)花は櫻木人は武士　花爲櫻花。人爲勇士。

(2)舜も人なり我も人なり　舜人也。我亦人也。

(3)これぞ日本一の名馬　此卽日本第一之名馬。

(4)生還するもの三人のみ　生還者三人而已。

(5)祝ふ今日こそ樂しけれ　所祝之今日誠樂哉。

(6)鳥すら恩を知る　鳥尙知恩。

(7)雨降り風さへ吹く　雨兼之以風。

如右之もは二助詞。白話常用之。其意義亦無甚難解。惟ぞとそのみ三助詞。於多數之中。而置重於一事物始用之。すら則於比較事物。而舉其輕者之時用之。

さへ則於表已有一物。更加一物之意時用之。白話之さへ。用於文言應用すら之時。亦往往有之。

此種助詞。雖由文中除去。於文義亦初無以異也。

〔七〕雲か山か吳か越か　雲耶山耶。吳耶越耶。

人やさき我やさき　人爲先乎。我爲先乎。

蝶よ花よと育つ　愛之如花如蝶。

さても降つたる雪かな　雪何其多哉。

かや爲疑問助詞。よ爲呼喚助詞。有時爲感動之意。かな爲感動助

詞。かゃ爲感動助詞。

〔八〕 これをば見よ　請觀之。

我には許せ　許我。

山よりも高ず　高於山。

何處までも見ん　必見而後已。

これぞと思ふ　殆卽此也。

われとそは無官の大夫敦盛　我卽無官之大夫敦盛。

如右疊用數多之助詞者頗多此不過重複各箇助詞之意義耳。

〔九〕 口語にて綴る　以白話演之。

一錢とてもなし　不名一錢。

人にして人に非ず　人而非人。

人として鳥に如かざるべ　可以人而不如鳥乎。
けんや

義經をして平氏を討たし　使義經討平氏。
む

如右之て及して。則不直接於體言。而接於已連於に、と或を之體言。にて、にして。即白話之で或であって之義也。

練習一　請用左列助詞。作爲短文。

よりは　をも　よりも　までも　すらも　のみは　へも　には　にも

第二章　動詞活用之名稱及意義

〔一〇〕動詞之有語尾變化。(卽活用)前已言之矣。今請言其活用與音義。

奈行變格活用動詞。其活用有六種格。今請以次言之。

第一活用格之「死な」可作爲「死なば」用。此爲尙未成立之格。故謂之將然格。

第二活用格之「死に」例如「死に損ふ」「死に難し」皆爲直接於他用言(動詞或形容詞)者。故謂之連用格。

第三活用格之「死ぬ」例如「人死ぬ」卽示語氣已完。故謂之終止格。

第四活用格之「死ぬる」例如「死ぬる人」「死ぬる時」皆接續於體言之上者。故謂之連體格。

第五活用格之「死ぬれ」例如「死ぬれども」「死ぬれば」皆示某條件已成立之時用之。故謂之已然格。

第六活用格之「死ぬ」惟命令之時用之。故謂之命令格。

奈行變格。有以上六種之活用格。今請以同一方法。配置其他活用動詞。於此六種格言之。

〔二〕四段活用動詞。祇有四種活用格。例如書かば、書き難し、書く人、書けども、書け。故終止格與連體格。已然格與命令格。無甚區別。

將然	連用	終止 連體	已然 命令
書かか	かき	かく	かけ

〔三〕良行變格活用動詞。亦有四種活用格。但連用格與終止格同。所以異於四段活用者卽此耳。

將然	連用 終止	連體	已然 命令
有あら	あり	ある	あれ

〔三〕上二段活用下二段活用動詞。亦有四種活用格。其第一活用。則兼將然連用命令三者。惟命令格必須加助詞「よ」。

將然連用命令	終止	連體	已然
起 おき	おく	おくる	おくれ
捨 すて	すつ	すつる	すつれ

〔一四〕上一段活用、下一段活用動詞。祇有三種活用格。故除第一活用兼有三活用外。其第二活用。則兼有終止連體二活用。命令格須加「よ」與前同。

將然連用命令	終止連體	已然
見 み	みる	みれ
蹴 け	ける	けれ

〔一五〕左行變格、加行變格活用動詞。則有五種活用格。故第一之將

然格。兼命令之用。惟命令格須加「よ」。

將然	連用	終止	連體	已然
命令	感ぜ	感じ	感ず	感ずる	感ずれ
來	き	く	くる	くれ

(注意)(一)在白話。動詞之終止格與連體格。全無區別。

(二)連用格爲轉成名詞者。

練習二　請言左之活用格之名稱。

食は　信じ　願ふ　見に　立ち　起くる　得る　恥ぢ　棄つ

燒くる　流す　書け　及第す　卒業せ

練習三　請言左列動詞之六種活用格。

持つ　禁ず　堪ふ　著る　悔ゆ　止む

練習四　請將左列文句中動詞之誤用者更正之。

(イ) 私慾を制することは難く放逸に流ることは易し　制私慾難。流於放逸易。

(ロ) 今や秋高く馬肥ゆ時なり　今乃秋高馬肥之時也。

(ハ) 妻戀ふ鹿の鳴く音あはれなり　悲哉思牝之鹿之聲。

(ニ) 人才智なきときは業を執り身を立つと能はず　人無才智。則不能執業立身。

(ホ) 疾病流行して死するもの多し　疾病流行。而死者多。

第三章　形容詞(含形容動詞)活用之名稱

〔一六〕今請以前課所學之六種活用格。分配於形容詞觀之。

善くば	將然	善則	
善くあり	連用		(此爲善之下接以動詞式)
善し	終止	善	
善き人	連體	善人	
善けれども	已然	雖善	

觀右列形容詞之四種活用格。可知其以將然格兼連用格矣。惟形容詞無命令格。

將然連用	終止	連體	已然
よく	よし	よき	よけれ

(注意)白話之形容詞無終止連體之別。

〔一七〕形容動詞之活用。一切與良行變格同。其所分擔之職務亦同。故亦有命令格。

將然	連用 終止	連體	已然 命令
よから	よかり	よかる	よかれ
詳なら	詳なり	詳なる	詳なれ
整然たら	整然たり	整然たる	整然たれ

第四章　助動詞活用之名稱

〔一八〕助動詞之活用。有同動詞者。有似形容詞者。第一篇已詳言之矣。故助動詞亦猶之種種動詞形容詞。有各段之名稱。

(一)

將然 連用 命令	終止	連體	已然

(1) れ　る　る　れる
(2) られ　らる　らる　られる
(3) せ　す　する　すれ
(4) させ　さす　さする　さすれ
(5) しめ　しむ　しむる　しむれ

其活用同下二段者

(二) 將然　連用　終止　連體　已然　命令

(1) なら　なり　なる　なれ
(2) たら　たり　たる　たれ
(3) ら　り　る　れ
(4) べから　べかり　べかる　べかれ

其活用同良行變格者

(注意) □ 爲現今不用者之符號。已見第一篇。

(三) 將然　連用　終止　連體　已然

(1) 可く　可し　可き　可け（れ）　其活用似形容詞者

(2) 如く　如し　如き

〔一九〕終止　連體　已然

ん　ん　め

き　し　しか

ず　ぬ　ね

（注意）直譯英文。往往有以連體格之し爲終止格者。幸勿誤用。

第五章　動詞與時之助動詞之連結（動詞之時）

〔三〇〕「書か」爲將然。「書き」爲連用。「書く」爲終止連體。「書け」爲已然命令。前已言之矣。今將動詞與助動詞之連結。舉例如左。

(1) 書かる　被書。

(2) 書きたり　方書。

(3) 書くべし　應書。

(1)乃表受身(被動)之意義。初無將然之義。(2)則連接於助動詞之「たり。」而不連接於用言。(3)則連接於助動詞之「べし」而非終止。依右例觀之。可知將然連用等名目。亦不過就其活用中之一種功用。爲之命令耳。動詞之種種活用格。實兼有可、連接於他助動詞之職務者。

助動詞獨立則不能顯其意義。動詞無助動詞之助。亦不能顯其種種作用。故以各種活用格。連於種種助動詞。而成各種之連結。今請以次言之。

(三)雨止む(雨止)　鳶飛ぶ(鳶飛)

如「止む」「飛ぶ」等單簡動詞。雖能表示起於現在之動作。然不能表示過去之動作。及未來之動作。故附加以時之助動詞。則動作

與時間之關係。自可曉然矣。

(イ)雨やみたり。　雨方止。

(イ)雨やめり。　雨方止。

(ロ)雨やみき。　雨已止矣。

(ハ)雨やまん。　雨將止。

(ニ)雨やみたり。き。　雨已止矣。

(ホ)雨やみたら。ん。　雨當已止矣。

(イ)表示其動作之方終。故謂之現在完了之時。又稱第一過去。(ロ)爲表示其動作已過去。故謂之過去之時。又稱第二過去。(ハ)表示其動作將起於未來。故謂之未來之時。(ニ)係疊用完了之時。與過去之時者。(ホ)係疊用完了之時與未來之時者。蓋(ニ)表示其動作已完了於過去之某時。(ホ)則表示其動作完了於未來之某時。故謂之過去完

了及未來完了之時。於是知動詞之時。有左列六種之區別。

(1) 書く　現在

(注意)現在對過去未來而言。如在無須言時之時。則不用時之助動詞。其式亦無變。以下倣此。

(2) 書きたり　書けり。　現在完了

(3) 書き。　過去

(4) 書きだり。　過去完了

(5) 書かん。　未來

(6) 書きたらん。　未來完了

(注意)(一)「たり」「き」「たりき」「たらん」四助動詞。則連於動詞之連用格。「ん」則連於將然格。惟加行變格之「來」。

則不連於「來き」。

(二)「り」惟四段活用、奈行變格活用、左行變格活用之動詞。例如「書けり」「死ねり」「感ぜり」等。則連於「ロ」列之活用格。近來雖有以「り」連於良行變格。爲「居れり」「異なれり」等者。然尙未通用。

(三)以下二段連於り。爲「堪へり」「受けり」者誤也。

(四)左行變格活用之動詞。則以將然格連於き之連體格(し)已然格。(しか)

及第せし。　及第せしか。

(五)左行四段活用動詞。與し、しか。之連絡。亦有書爲「押せし」「殘せし」等。以已然格續之。此實與左行變格或左行下二段動詞之連續相混者。此法今雖盛行。

然尙未成爲定例。

(六) 如「やみぬ」所用之ぬ。雖亦示完了之時。然今文除終止格外。則不用之。

練習五　請將左列文句中連結之誤者正之。

(イ) 勉强しし甲斐ありて首尾よく及第せり　用功有效遂及第。

(ロ) 一旦名譽を落せしが後之を回復せり　一時名譽雖墮落。既又回復之矣。

(ハ) 人情風俗は時代と國土とに由りて異なれり　人情風俗。由時代與國土而異。

(ニ) 本校所定の學科を修めて正に其業を卒へり　修本校所定之學科。刻方卒業。

（ホ）我が海軍にては現今四箇所に軍港を設けり　我國海軍。現設軍港四處。

（ヘ）賴時は流矢に中りて死しかども貞任の勢尙盛なり　賴時雖中流矢而死。貞任之勢尙盛。

（ト）尊王の論盛にして幕府遂に倒れたり　尊王之論甚盛。而幕府遂倒矣。

（チ）一日も光陰を徒費しし事なし　雖一日亦不徒費光陰。

（リ）一大驚歎の聲は全國に響き渡れり彼の成功を祝する聲は又之に伴へぬ　一大驚歎之聲。聞於全國。而祝其成功之聲。亦隨之而至。

第六章　動詞與法之助動詞之連結（動詞之法）

〔三〕表示動詞之時之法。前課已言之矣。此亦不過述動作之狀態。明其時間而已如欲表示推量義務種種之意義。則不可無法之助動詞。

(イ) 書くべし　想書　推量之法
(ロ) 書くべし　當書　義務之法
(ハ) 書くべし　能書　能力之法
(ニ) 書くべし　應書　命令之法

附加べし。便可表示右列種種之意義。

（注意）命令法雖可以「書け」之命令格。表其意義。但如「書くべし」之附加べし。亦能表命令之意。

(イ) 推量之法（四種之時）

〔三三〕「明日は雨降るべし」「明日は雨降るなるべし」此爲推量「明日將雨」之意。凡推量之法。須附加べし或なるべし。茲分配之於時如左。

現在	書くべし	現在完了	書きたるなるべし
	書くなるべし		書けるなるべし
過去	書きしなるべし	過去完了	書きたりしなるべし

推量有四種之時如右。惟無未來之時。卽使推量未來之事。此推量究屬現在之動作。故無未來之時。

（注意）（一）良行變格動詞。及與良行變格同一活用者。皆以連體格連於べし。其他皆用終止格連續之。

（二）與なるべし連續。則必用連體格。

（ロ）義務之法（三種之時）

〔三四〕「丁年に達すれば兵役に服すべし」此爲表「有應服兵役」之義務之意。可分爲三種之時如左。

現在　書くべし　應書。
過去　書くべかりき　已書。
未來　書くべからん（べけん）　將書。

有右之三時。而無完了之時。

（ハ）能力之法（三種之時）

〔三五〕「六尺の屏風も躍らば越ゆべし」此爲表有一躍而過之能力之意。猶之義務。可分爲三種之時。

現在　書くべし　能書。
過去　書くべかりき　已能書。
未來　書くべからん（べけん）　將能書。

（注意）（一）べからん可略爲べけん。

（二）此雖爲以助動詞示能力者。惟今文之以動詞「得」字示能力者。例如「書き得」「書くを得」亦不少。

（二）命令之法（一種之時）

〔三六〕「規則を守るべし」此爲命其「須守規則」之意。祇有一種之時。

現在　書くべし　須書。

被命之動作。雖在未來。命令之動作。則爲現在。故無過去或未來之命令。

練習六　左列文句中。有誤相連結者。請更正之。

（イ）一覽しし人は東の入口より退場するべし　已觀覽之人。當由東門退出。

（ロ）今日學ばざれば他日必　今日不學。他日則必悔。

ず悔ゆべし

(八) われ等の利用する天然物の中にて最も要用なるものは何なるかと問はゞ何人もまづ指を石炭に屈するなるべし

如有以我等利用之天然物中。以何物爲最要問者。無論何人。當爲石炭。首屈一指。

第七章　動詞與否定助動詞之連結(動詞之式)

〔三七〕以上皆就動詞之肯定言之。如將動詞打消。則必須用ず或ざり。其關係如左。

書く	肯定之式
書かず。	否定之式

今請再分配於時考之。

現在　書かす。　不書。
過去　書かざりき。　已不書。
未來　書かざらん。　將不書。

（注意）今之文言。不用完了之時。

（イ）推量之法

書かざるべし。　想不書。
現在　書かざるなるべし。
過去　書かざりしなるべし。　想未曾書。

（ロ）義務

（ハ）能力之法

現在　書くべからず。　不可書。
過去　書くべからざりき。　當時已不可書。
未來　書くべからざらん。　將不可書。

(二)　命令之法

現在　書くべからず　不可書。

〔二九〕表示義務者。有時用二重之否定。以强其意義。二重之否定。復爲肯定之意。

現在　書かざるべからず　不可不書。

過去　書かざるべからざりき　當時已不可不書。

未來　書かざるべからざらん　將不可不書。

〔三〇〕助動詞之まじ。係兼有推量之法與否定之式者。卽白話之所謂まい是也。連於終止格者。與べし同。參看〔三三〕之注意(一)。

練習七　左列文句中。有誤相連結者。請更正之。

(イ)　品物に手を觸るるべからず　不可以手觸物。

(ロ)　此處塵芥を捨てべからず　不可棄塵芥於此。

(ハ)　猥に出入するべからず　不可妄出入。

(ニ)　これは學生としてするまじき所業なり　此爲學生者所不宜爲之事也。

第八章　動詞與受身及使役之助動詞之連結(動詞之相)

〔三〕以上所言之動詞之連結。皆爲以時之表示法。法之表示法。否定之表示法等。而行動作之種種用法。然如「人に打たる」(爲人所打)「路に棄てらる」(被棄於路)等。加助動詞之る、らる則爲示受動作(受身)之意義。加す、さす、しむ等。爲「打たす」(使打)「棄てさす」(使棄)「歸らしむ」(使歸)則爲表示使人動作(使役)之

意義。加「せらる」「させらる」「しめらる」等。爲「打たせらる」(被使打)「棄てさせらる」(被使棄)「歸らしめらる」(被使歸)。則表示爲人所使之動作(使役之受身)之義。此之謂動詞之相。其關係如左。

(イ)　受身之相　書かる　被書。

(ロ)　使役之相　書かしむ　使書。

(ハ)　使役之受身之相　書かせらるしめらる　被使書。

〔三二〕與受身使役及使役之受身之助動詞結合之動詞。猶之普通動詞。亦有種種之時及法。又連於打消之助動詞。則如第一表。

(注意)(一)る(受身)す(使役)せらる(使役之受身)連於四段活用、奈行變格、良行變格(卽作爲否定時有あ列之音)之動詞。らる(受身)さす(使役)させらる(使役之受身)則

連於其他之動詞。しむ、しめらる。連於一切動詞。

(二)以佐行變格。連於らるさす之時。爲「感動せらる」「感動せさす」固矣。但近來每有作爲「感動さる」「感動さす」者。然尙未成爲定例。

(三)以下二段活用動詞之「得」。連於しむ之時。爲「得しむ」固矣。但書爲「得せしむ」者亦不少。此亦未可據爲定例也。

〔三三〕使役相受身相使役受身相之動詞。亦可連於時法及式之助動詞。閱別表第一卽知之。

(注意)有以否定之式。及能力之法。再爲使役者。其活用觀第二表卽知之。

練習八　左列文句中。有誤相連結者。請更正之。

(イ) 舊規則は今年限り廢止さる新規則は明年より行はるゝべし　舊規則限今年廢止。新規則由明年施行。

(ロ) 諸藩に勅して之を議さしむ　勅諸藩議之。

(ハ) 一郎に畫を畫かせ二郎に書を讀ませす　使一郎作畫。使二郎讀書。

(ニ) 敵の大隊は我軍に包圍されて全滅したり　敵之大隊。被我軍包圍而全滅。

(ホ) 資金を給して其好むところを研究させたり　給以資金。使研究其所好者。

(ヘ) 希望者には出席すること　希望者當使其得出席。

とを得せしむべし

(ト)

普國はかつてなぽれん　普國嘗彼拿破侖一世之大打擊。國內大抵皆爲法軍之馬蹄所蹂躪。

一世の大打擊を被り國內おほかた佛軍の馬蹄に蹂躪されたり

練習九　請將左列之動詞。連結於時與法之助動詞。

崩す　流る　見る　落つ　勉强す

練習十　請依第一表。示左列動詞一切之連結。

取る　有り　變ず

第九章　形容動詞與助動詞之連結

〔三四〕有與ら行變格同一活用之形容動詞。亦可連於助動詞。其連結如左。

	(肯定)	(否定)
現在	詳なり	詳ならず。
過去	詳なりき。	詳ならざりき。
未來	詳ならん。	詳ならざらん。

〔三五〕附加以法則如左。

(イ) 推量之法

現在	詳なるべし。	詳ならざるべし。
過去	詳なりしなるべし。	詳ならざりしなるべし。

(ロ) 義務　(ハ) 能力之法

現在	詳なるべし。	詳なるべからず。
過去	詳なるべかりき。	詳なるべからざりき。
未來	詳なるべからん(べけん)	詳なるべからざらん。

〔三六〕又可作爲使役之相如左。

現在	詳ならしむ。	詳ならしめず。
現在完了	詳ならしめたり。	
過去	詳ならしめき。	詳ならしめざりき。
過去完了	詳ならしめたりき。	
未來	詳ならしめん。	詳なるべからざらん。
未來完了	詳ならしめたらん。	

〔三七〕使役之相。亦有種種之法。觀第二表卽知之。茲不贅。

〔三八〕月明にして星稀なり　　月明星稀。

舉止閑雅にして容姿美麗なり　　舉止閑雅。而容姿美麗。

形容動詞之在文中者。則常連於助詞之して。

練習十一　請言形容動詞なかり一切之連結。

第十章　時法相之意義之轉換

〔三九〕未來　書かん　書かう　欲書。

未來完了　書きたらん　書いたらう　當已書。

使役相之未來　書かしめん　書かせよう　欲使書。

能力法之未來　書くべからん　書ける筈たらう　當能書。

觀右例。可知示未來時之一切連結。亦可用於示推量之法。白話同。參觀前例。便可瞭然矣。

此係時之助動詞。轉成法之助動詞也。

〔四〇〕推量之法　書くべし　書くたらう　欲書。

推量之否定　書かざるべし　書かないたらう　欲不書。

觀右之白話。可知推量法亦可作爲未來之時用。此係法之助動詞。轉成時之助動詞也。

〔四〕受身之相　書かる　書かれる　被書。

使役之受身之相　書かせらる　書かせられる　被使書。

觀右之白話。便知受身及使役之受身。可作爲敬語用。敬語又有用動詞給ふ爲助動詞。附於使役相之下者。其例如左。

書かせ給ふ

古文亦有專用敬語相爲敬語者。

此乃相之助動詞。轉成敬語之助動詞也。

練習十二　請以白話述左之連結之意義。

(イ)　佐藤先生は去年獨逸國より歸朝せられたり　佐藤先生。去年歸自德國。

(ロ)　新聞雜誌も備へありて居ながら歐米各國の近　新聞雜誌俱備。雖不出戶。亦能知歐美各國近狀。

狀も知らるゝなり

(ハ) 書籍室は船の前方に在り凡そ二十疊を敷くべし

書籍室在船首。廣可二十疊。

(ニ) 毎日千字づゝ書き出すべしと命ぜられたり

命我毎日作千字。

(ホ) 今の境遇にて正式の學校に入學せんことおもひもよらず

以今之境遇。欲入正式之學校。終無望矣。

(ヘ) 蟻の舉動を觀察せよ彼等の身長よりは幾十倍もあらんかと思ふ昆蟲

請觀蟻之舉動。竟能運數十倍於己之身長之昆蟲而行。

を運搬し行くなり

（ト）

來る十日午前八時御出　有旨將於十日午前八時出宮。

門陸軍士官學校へ行幸　行幸陸軍士官學校。

仰出さる

第十一章　指定及比較之助動詞之連結

〔四二〕知りしなるべし

知りたりしなるべし

推量之法。常用助動詞之なり。前已言之矣。此助動詞。本爲强其語勢者。又有指定之意義。各種之連語。皆可以なり結之。其例如左。

書く　書くなり

書きたり　書きたるなり

美しかりき　美しかりしなり

書かす　書かするなり

書かせず　書かせざるなり

書かるべし　書かるべきなり

書かせられざるべし　書かせられざるべきなり

右皆接續於連體格者。此助動詞又可連於普通形容詞之連體格。

〔四三〕正成は忠臣なり。　正成忠臣也。

三つと二つとの和は五つなり。　三與二之和爲五。

舜も人なり。我も人なり。　舜人也。我亦人也。

我は我なり。彼は彼なり。　我爲我。彼爲彼。

右之「なり」。卽連於體言之下者。

〔四四〕父父たらざれども子子たり　父雖不父。而子則子也。

これは何たることぞ　是何事也。

右之「たり」。卽連於體言者。

なりたり二者。謂之指定助動詞。

〔四五〕天女を見るが如し　如見天女。

花の如し　如花。

右卽以體言連於の。以用言連於が。然後再連續於比較助動詞之「如し」者。但在用言。亦有將が省略者。「如し」則以連用格連於なり。

第十二章　助動詞連結之順序

〔四六〕動詞形容動詞與種種助動詞之連結。第五章以下已詳言之矣。雖然。一個動詞及形容動詞。與各種之助動詞連結。不獨能表時之差別。或表推量可能義務命令等法。或示打消之意。或示受身、使役、使役之受身等作用。如將此等助動詞。互相重疊用之。又

能表示極紆迴曲折之意觀。第一表及第二表所載可。知助動詞之效用甚大。然此等助動詞之互相疊用。亦有一定之順序。其例如左。

(一)使役(二)受身(三)敬語(四)打消(五)完了之時(六)普通之時(七)指定(八)法

書かせ……られ……ず

書き……給ひ……たり……き

書く……なる……べし

書か……れ……給は……ざり……き

書かせ……給は……ざり……し……なる……べし

〔四七〕驚くべき程。發達したりしなり　其發達誠可驚歎。

感ぜしむる能はざりき　不能使感動。

書かざるにあらず　非不書。

助詞在句中如與體言用言助詞遇。其連結之順序復如初。

〔四八〕故句中如與「ざり」「べかり」等。含有あり之助動詞遇。其連結之順序遂亂矣。觀別表卽知之。

〔四九〕如有數個助動詞。互相重疊。連結於動詞或形容動詞之下。直可視爲一個動詞。或一個形容動詞。其定將然連用等六種格。則猶之單純之動詞。其連結則依最終之助動詞之活用。今舉例如左。

將然	連用	終止	連體	已然	命令
書かしめば	書かしめ	書かしむ	書かしむる	書かしむれども	書かしめよ
書かせたらば	書かせたり	書かせたり	書かせたる	書かせたれども	書かせたれ
書かれざらば	書かれず	書かれず	書かれざる	書かれざれども	書かれざれ

(注意)將然格亦有用ん。者。例如「論ぜずんば」「聞くべくんば」

等。此不過爲便於誦讀耳。用言與助動詞相連結者。謂之活用連語。

練習十三　請言左列活用連語之將然格連體格已然格。

論ぜざるべし　可不論矣。

堪ふべからず　不能堪。

出發し給ふ　出發。

盛大なりしなり　盛大。

感ぜしむ　使覺。

練習十四　左列文句中。有誤相連結者。請更正之。

(イ)　大納言にして右大將を　使大納言兼右大將。

兼ねしめり

(ロ)　馬尼刺市は一萬の西班　馬尼刺市有西班牙兵一萬防

牙兵に防禦されありと　守之
ひふ

(ハ)
彼等が一致協力の力は甚だ強固なれば之によりてわれ等には想像し得べからざる大事業をも成し遂ぐなり

彼等一致協力之力甚強。因此吾等意料所不到之大事業。亦能成功。

(ニ)
一たび鄉國を出づれば何人も堪へ難き望鄉の念にうたるゝ

一旦去鄉國。不問何人。無不爲難堪之鄉心所惱者。

往年米國に博覽會の舉ありし時エスキモー土

往者美國有博覽會之舉。嘗設愛斯基摩土人之部落。招致多

人の部落を置き數多の土人を伴へ來りてそこに住ましたることありし

數土人。使住於該處。

(ホ)

シエムスワットの蒸氣機關を發明ししは西歷一千七百六十九年の事なりしされど之を應用したるは鐵道の發明さるゝまでにはなほ數十年の歲月と數多の人苦心とを要したるなり

薛牧斯滑脫之發明蒸氣機關。在西歷一千七百六十九年。至於應用之以發明鐵路。則又須數十年之歲月。與多數人之苦心

第十三章　用言及活用連語與助詞之連結

〔五〇〕

の	花を見るの。記	看花之記。
	何ぞ思はざるの甚しき	何其不思之甚也。
が	信ずべきが如し	如可信。
	甚しかりしが如し	甚似。
を	知らざるを知らずとせよ。	以不知爲不知。
	論ぜざるを得ず	不得不論。
に	忍耐の久さに驚く	驚於耐忍之久。
へ	餘り疎遠ねるへは通知せず	其太疎遠者。則不通知之。
より	日の出づるより	自日出。

まで　日の沒するまで。　至日沒。

と　愛すると。愛せざると。　愛與不愛。

小なると。大なると。　小與大。

は　今の世に生れたるは。大なる幸なり　生於今之世。誠大幸也。

も　行くも。歸るも。分れては　行亦別。歸亦別。

ぞ　何故なるぞ。　里何故乎。

とそ　言はざることそよけれ　不言爲是。

のみ　馬前まざるのみ。　馬不進耳。

か　行くか。歸るか。　行乎歸乎。

旅順は今日中に陷落すべきか。　旅順殆將陷落於今日之中乎。

や　余の始めて學校に入學するや。　余之始入學校也。

よ　面白き事を見たるよ。　請觀此有趣味之事。

この繪のうつくしきよ。　美哉此畫。

かな　いふべきかな。　誠可謂……哉。

如右之接於體言之下之助詞。皆可接於動詞、形容詞、或活用連語之連體格下。於此之時。視該動詞、形容詞、活用連語。爲一體言。自可瞭然矣。

亦有不能以連體格相連結者如左。

〔五二〕論ずる人ありといふ　有議論之人。

行くべしと諭す　諭其當往。

見たる人なしといふ　無見者。

〔五〇〕所舉之「と」。乃並舉二物。互相比較者。唯此時可接於連體格。此外皆接於終止格。如右例。

〔五一〕(イ)ありやなしや。　有耶無耶。
(ロ)汝は日本國民に非ずや。　汝非日本國民乎。
(ハ)打てよこらせよ　打之懲之。

〔五〇〕所舉之「や」「よ」。乃感動之「や」「よ」。爲疑問用之「や」。以終止格連結。爲命令用之「よ」。以命令格連結。觀右例卽知之。

(注意)(一)疑問之や。亦爲反語之意。觀(ロ)之例卽知之。
(二)如上有何日幾何何處等疑問之詞。其下則必用助詞か。雖間有用や者。尙未成爲定例。

〔五三〕終日待ちたるが何の音便　雖待之終日。渺無消息。
なかりき

日はまだ暮れざるにはや　日尙未暮。早已黑暗矣。
暗くなれり
今日降るべしとは思はざりしを　今日之雨。誠非意料所及。

以上所舉之「か」「に」「を」。與〔五〇〕所舉者不同。此只能續於用言或活用連語。不能續於體言。必前後事情相背始用之。以連體格連結。則與前之「が」「に」「を」同。

〔五四〕花笑かば。告げん　花開則見告。
無くば。幸なり　無則幸甚。
樂あれば。苦あり　有樂則有苦。
遠ければ。行かず　遠則不行。
悔ゆども。及ばず　雖悔無及。

廉なれど。品惡し　價雖廉而物劣。
如何なる事ありとも。　不論何事。
如何に美麗なりとも。　雖如何美麗。
花笑きて散る　花開而落。
上書して諫む　上書諫之。

右之「ば」「ど」「ども」「とも」「て」等。亦爲不能附屬於體言之助詞。祇能附屬於用言活用連語而已。ば有時可與將然格已然格連結。ど、ども則連於已然格。とも則連於終止格。(形容詞則連於連用格)て則連於連用格。

ば用於前後事情相應之時。ど、ども、とも用於が、に、を前後相背之時。て爲連結前後者。

(注意)亦有應用ども之處。代之以も者。例如「諸處を詮索する。

。見當らず」（四處尋覓終未之見）惟尚未成爲定例。

練習十五　左列之用言活用連語。如有誤相接續者。請更正之。

（イ）數日の旅行に過きざり　雖不過數日之旅行。所得殊不しかども得るところは　少。

少からざりしと信ず

（ロ）八百と十五との差は幾　八百與十五之差幾何。

何なりや

（ハ）少年の時學ばざれば老　少年之時不學。至老雖悔亦無

年に至りて悔ゆるとも　及矣。

及ぶべからず

（ニ）關門閉ぢざるも通行す　關門雖不閉。而行人甚稀。

る人稀なり

(ホ) 歳月は流る如し　歳月如流。

(ヘ) 人と禽獸との區別は言語を有すると有せざるとに在りと論ずる人あり　有謂人禽之區別。在有言語與無言語者。

(ト) 出席せるや否やを檢して後問題を與ふべし　當先查其出席與否。然後與以問題。

(チ) 蟻が冬期中の食料を貯ふるといふことは全く世人の誤解に屬せり　有謂蟻能貯蓄冬期中之食料者。此全屬於世人之誤解。

(リ) 戰路に添へる電線は悉く切斷せられて北京天　設於戰路之電線。全行切斷。北京天津間之交通。祇有通過通

津間の交通は通州を通　州之電線一條耳。
過する一條の電線を存
するのみ

第十四章　用言之慣用語句

〔五五〕用言、活用連語。不獨連於助詞、體言、或他用言。又可再連於他用言、活用連語。（〔四七〕參照）如是則能力、命令、願望等。皆能曲盡其妙。就中以動詞之「知る」。爲最通用之活用連語。今爲之舉例如左。

〔五六〕知るに足る　足知。
知るを得　能知。
知るといふべし　可謂知矣。
知らんとす　欲知。

知らんと欲す　欲知。
知るべければなり　可知也。
知らしむるにあり　在於使知。
知らしむるを要す　要使知。
知りたりといふ　謂之知。
知らざるに非ず　非不知。
知るべくもあらず　非可知。
知らざるのみならず　不僅不知。

右皆連於種種之助詞。復移於下接之用言及活用連語者。

〔五七〕

知らざる所なり　所不知也。
知らしむること勿れ　勿使知之。
知ること能はず　不能知。

知るべきこと多し　能知者甚多。

知らしめざることならん　欲不使知之。

知らしむべからざる所以なり　所以不可使知也。

右皆連於體言。復移於下接之用言及活用連語者。

〔五八〕知る能はず。

右爲連於用言。而移於他之活用連語者。

〔五九〕由未來之意義。轉成推量法之意義之連語。有時亦作爲反語之意義用。惟上當附加適當之副詞代名詞。下當附加感歎助詞之や。

誰か之を知らんや　誰知之。

豈に知らざらんや　豈不知之。

安ぞ知らんや　安知。

豈に知らざるべけんや　豈可以不知哉。

右爲日常最通用者。其意義與用法須切記。

練習十六　請將左之活用連語。改爲白話。

(イ)國民の義務を果さゞるべからず　不可不盡國民之義務。

(ロ)蓋し測らざるべからざるものあらん　蓋有不可不測者。

(ハ)豈に寒心せざるべけんや　能無寒心哉。

(ニ)何ぞ謬れるの甚しきや　何謬之甚也。

(ホ)惡まずんばあらざるなり　非不惡也。

(ヘ) 最も恐るべきものにあらずや　非最可恐者乎。

(ト) 志望を成し遂ぐること能はざりき　不能成就其志望。

(チ) 亦以て其尋常ならざるを知るべし　亦可以知其非尋常者。

(リ) 見るものとして教訓ならざるはなし　所見者無一不爲教訓之資。

第十五章　體言與用言之關係　主語述語客語

〔六〇〕山崩る　柿落つ

在右列之文。山柿爲崩者落者。而崩る落つる之動作。乃山柿所爲之動作也。其因地震而崩乎。抑因地雷而崩乎。雖未能明瞭。而崩之

一語。所表示之意義。則不外單純山崩之現象。柿之墜落亦然。其因風而落乎。抑爲猿而落乎。其原因雖不明。而「落っ」之一語。已能表示「落」之現象。如此動詞所示之動作。乃專由動作者成立之。故謂之自動詞。

於此之時。作爲動作者用之體言。對其動詞。謂之主語。動詞對主語。謂之述語。

〔六一〕猿(柿を)落す　　猿將柿推落。

地震(山を)崩す　　地震而山崩。

右文如但言「猿落す」「地震崩す」。則無由知其落者崩者爲何物。必加「柿ヲ」「山ヲ」。其意義始完全。此主語述語之外。所須之某動詞。謂之他動詞。於此之時。以「何ヲ」表示之體言。謂之客語。

如「落す」「崩す」等動作。動作者(主語)之外。倘無動作所及之目的物。

其動作則決不能成立。

〔六二〕旅人　路を　問ふ　　旅人問路。

父　褒美を　與ふ　　父與以褒美。

右文中之旅人及父。主語也。與ふ「問ふ。述語也。路及褒美。客語也。雖然。問及與之動作。非有所問之人。及所與之人。則不能成立。如此之動作。動作者(主語)與動作之目的物(客語)外。須有被動作之人。其動作始能成立。

旅人　里人に　路を　問ふ　　旅人問路於里人。

父　子に　褒美を　與ふ　　父以褒美與子。

加「里人」及「子」。其動作之關係始明瞭。故「問」「與」等動詞。除第一客語外。又不可無第二客語。

他動詞。有須二箇客語者。

〔六三〕自動詞他動詞中。或同出於一語原。而異其活用者。其例如左。

家燒く(下二段)　餅を燒く(四段)　雨止む(四段)　運動を止む(下二段)

〔六四〕同一動詞。又有時爲他動詞用。時爲自動詞用者。其例如左。

花開く(四段)　戸を開く(四段)

練習十七　左列動詞。何字爲他動。何字爲自動。請區別之。

沈む　分く　分つ　戰ふ　整ふ　知る　散る

流る　流す　宿る　宿す　燒く　退く　攻擊す

主張す　立つ　敗北す　出發す　評す

練習十八　請舉對於左列自動詞之他動詞。

見ゆ　亡ぶ　起く　聞ゆ　倒る　終る　始る

練習十九　請將左列他動詞中之需第二客語者摘出。

教ふ　問ふ　願ふ　與ふ　思ふ　見る　食ふ　加ふ

第十六章　主語之轉換

〔六五〕母　死ぬ　　母死。

太郎　蟬を　捕ふ　　太郎捕蟬。

父　子に　財産を　讓る　　父讓財産於子。

右例中之死ぬ。爲自動詞。捕ふ、讓る。爲他動詞。於此之時。爲主語之母、太郎、父。皆動作者也。

〔六六〕子　母に　死なる　　子爲母所死。

如右之以自動詞。爲受身之式。則被動作者。對於死なる而爲主語。故前之主語(卽動作者)用助詞に。成爲第二客語之式。以自動詞作爲受身之時。必有被動作者。新入爲主語。從前之主語。則變爲客語。

(注意)英語無由自動詞而生他動詞者。

〔六七〕蟬　太郎に　捕へらる　　蟬爲太郎所捕。

如右之以他動詞作受身之時。從前之客語「蟬」。則轉爲「捕へらる」之主語。從前之主語(卽動作者)則用助詞「に」。作爲第二客語之式。以他動詞作受身之時。客語與主語。則互相轉換。

〔六八〕子　父より　財產を　讓らる　　子被父讓以財產。

財產　父より　子に　讓らる　　財產由父讓與子。

以需二箇客語之他動詞作受身之時。則生二種之受身。從前之客語。轉爲主語。從前之第二客語。轉爲主語。

一箇客語之變爲主語之時。其他客語則仍舊。

〔六九〕(1)　敵軍　退く　　敵軍退矣。

(2)　下女　餅を　燒く　　女僕燒餅。

(1)爲自動詞。而(2)他動詞也。於此之時。敵軍及下女。爲動作者。對於退く、燒く。則爲主語。

〔七〇〕今改爲使役之式如左。

敵軍に　退かしむ　使敵軍退。

下女に　餅を　燒かしむ　使女僕燒餅。

則使敵軍退者及使燒餅者。代爲主語。不可不改爲。

我軍の攻擊は　敵軍に　退かしむ　我軍之攻擊。使敵軍退去。

主婦は　下女に　餅を　燒かしむ　主婦使女僕燒餅。

如是則從前之動作者。(卽主語)轉爲客語。然受身之式有二如左。

敵軍に。退かしむ　下女に。餅を燒かしむ

敵軍を。して。退かしむ　下女を。して。餅を燒かしむ

從前之主語。可用「に」或「を」或「して」。爲第一客語或第二客語。是

故以自動詞或他動詞。作使役之動詞時。動作之命令者。則新入爲主語。從前之主語。則轉爲客語。

〔七一〕我軍　敵に退かしむ

主婦　下女に餅を燒かしむ

以右例之使役。復作爲受身如左。

敵軍　我軍に　退かしめらる　敵軍被我軍使退。

下女　主婦に　餅を燒かしめらる　女僕被主婦使燒餅。

則被使役者爲主語。故退く燒く之動作者。復爲主語。命令者爲客語。用助詞に。爲第二客語之式。

〔七二〕敵壘　我軍の爲めに　略取せらる　敵壘爲我軍所略取。

我軍　大隊をして　敵兵を討たしむ　我軍使大隊討敵兵。

主婦　下女に命じて　餅を燒かしむ　主婦命女僕燒餅。

客語亦視文章句調。及其他事情。單純用に。或を。顯者甚少。作別種之式者則頗多。

練習二十　請改左列之文。爲受身之式。

(イ)公曉實朝を殺したり　公曉殺實朝。

(ロ)猫鼠を捕へんとす　猫將捕鼠。

(ハ)慈善家乞食を救はず　慈善家不救乞食。

練習二十一　請改左列之文。爲使役之式。

(イ)牧童牛を曳く　牧童曳牛。

(ロ)兒童文を作らず　兒童不作文。

(ハ)舟沈めり　舟沈矣。

練習二十二　請改左列之文。爲使役之受身。

(イ)笠置艦大沽に派遣せら　笠置艦被派遣赴大沽。

る

(ロ) 敵兵退却す　　敵兵退却。

(ハ) 我軍敵を擊退す　　我軍擊退敵兵。

第十七章　補語

〔七三〕(イ) 造營成る。　　雀蛤となる。

湯水になる。

(ロ) 偉人は大業を成す。　　冰を水になす

天皇憲法を定む。　　華盛頓を大統領と定む

(イ)之成る。爲自動詞。只有一主語。其動作亦能成立。觀上段之例便知之。雖然。在下段之例。如但云雀成る。湯成る。則不知其成爲何物。須云蛤と、水に。其意義始完全。

(ロ)之成す定む。爲他動詞。依主語與客語。其動作雖能成立。但在下

段之例。如但云冰を華盛頓を。則不知其成何物。定何物。須云水に大統領と。其意義始明瞭。

如此所用之語。謂之補語。故自動詞他動詞。有時皆可作爲補語用。

（注意）

（一）補語常伴助詞と或に。

（二）客語亦有伴助詞之に者。彼此不得混同。蓋客語雖可因主語之轉換。作爲主語。補語則決不能轉成主語。此前課已詳言之矣。

〔七四〕余は六時に起きたり　　余六時起牀。

今日東京に着す　　今日到東京。

如右之言時間或地方者。亦常伴助詞之に。此係作爲副詞用者。非補語。亦非客語也。

〔七五〕秋草爛熳と笑く　　秋草爛熳怒開。

櫻花は奇麗に笑きたり　櫻花已開。極其豔麗。

右之奇麗に、爛熳と。皆爲形容動詞。初非補語。亦非客語也。

〔七六〕趣味自然に生ず　趣味自生。

光秀蹶然として立つ　光秀蹶然而起。

右之自然に、蹶然と。皆爲副詞。初非補語。亦非客語也。

練習二十三　請將左列文句中之客語補足語摘出。

(イ) 中江藤樹先生は俗稱を　中江藤樹先生俗稱與右衞門。

與右衞門といへり

(ロ) 荷物を東京より京都まで輸送す　將貨物由東京輸送至京都。

(ハ) 舟或は右に傾き或は左に傾く　舟或傾於右。或傾於左。

(二)　二月十一日を紀元節と定む　定二月十一日爲紀元節。

(ホ)　信用を得んと欲せば時間を堅く守らざるべからず　欲得信用。則不可不堅守約定之時間。

第三篇　文之構造

第一章　單語　連語　文

〔一〕月　雨　學問　全國　師友　爲す　學ぶ　習ふ　明なり　霽る

右列皆單語也。單語爲表示各箇之概念者。

〔二〕益なかるべし　習はしむ　擇ぶべし　霽れたり　爲すには

惡しければ　學ぶとも　琢かざれは　全國の　壯丁に

師友を　花よりも

右列皆由單語集合之連語也。連語雖爲單語集合而成。尙未能表示完結之思想。

〔三〕月明なり　月明。

雨霽れたり　雨已霽。

玉琢かざれば器とならず　玉不琢不成器。

人學ばざれば道を知らず　人不學不知道。

學問をなすには師友を擇ぶべし　求學問。當擇師友。

師友あしければ學ぶとも益なかるべし　師友不良。雖學亦無益。

全國の壯丁に兵を習はむ　使全國之壯丁習兵。

右列皆表示完結之思想者。

單語之集合而能表示完結之思想者。謂之文。

第二章　文之主語及述語

〔四〕完結之思想(卽文)中。必有爲其題目者。文者不過就題目敍述某事耳。有犬、花、兵卒。而後有走る散りたり戰ふ等之敍述。於是

始成「犬走る」「花散りたり」「兵卒戰ふ」之文章。

〔五〕主語述語等名稱。前已言之矣。爲文之題目者曰主語。爲文之敍述者曰述語。文乃依主語與述語之關係而成者。故極單簡之文。亦須有一主語與一述語。

〔六〕

(イ) 攘夷論起れり　攘夷論起。

(ロ) 雨霽れたり　雨已霽。

(ハ) 汝知らず　汝不知。

(ニ) 月明たり　月明。

(ホ) 點數少し　分數少。

右列之文。皆以爲主語之體言一個。與爲述語之用言(或活用連語)一個。集合而成。爲文之最簡單者。

依右例以觀。可知。主語。多。爲。體。言。述語。多。爲。用。言。或活。用。連。語。

〔七〕言ふに易く行ふは難し　言易行難。

教ふるは學ぶの半なり　教者學之半也。

通例雖以體言爲主語。然如右之以用言爲主語者亦不少。此皆將用言作爲體言用也。

〔八〕見るもの稀なり　觀者甚少。

信ずること篤し　篤信。

如右之以連結於もの、こと等體言之連語。爲文之主語者亦不尠。於此之時。文法上雖視もの、こと等爲主語。然其意義。則以連語全體。爲主語之用。

〔九〕正成は忠臣なり　正成忠臣也。

東京は日本の大都なり　東京日本之大都也。

容貌花の如し　容貌如花。

通例皆以用言爲述語。但如右例之以助動詞爲述語者亦頗多。

これは何の繪ぞ。　此爲何畫。

汝は正成の子か。　汝爲正成之子乎。

如右例亦有以助詞爲文之述語者。

〔一〇〕主語與述語之關係。視爲述語者之種類。而異其性質。

(イ)動詞爲述語之時。則表示「何物爲何作用」之關係。

風吹く　　攘夷論起る

(ロ)形容詞或助動詞之如し爲述語之時。則表示「何物爲何狀」之關係。

月明なり　　月銀の如し

(ハ)助動詞之なり・たり或助詞爲述語之時。則表示「何物爲何物」之關係。

日本は神國なり　東京は日本の都なり

これは梅の花ぞ

練習一　請將左列文句中之主語述語摘出。

(イ)日月流水の如し　日月如流。

(ロ)此の頃世論紛紛たり　近來世論紛紛。

(ハ)富家の子は世間の苦を知らず　富家之子。不知世間之苦。

(ニ)過ぎたるはなほ及ばざるが如し　過猶不及。

(ホ)才子必ずしも多病ならず　才子不必多病。

(ヘ)噴火口の形は漏斗狀をなせり　噴火口之形。爲漏斗狀。

(ト) 言はぬは言ふにまさる　不言優於言。

(チ) 自ら勞するものは天祐を得　自勞者得天祐。

(リ) 河海は細流を擇ばず　河海不擇細流。

(ス) ヒマラヤ山脈中のベレスト峯は世界の最高山なり　喜馬拉山脈中之白勒斯德峯。爲世界之最高山。

(ル) 花崗石とは御影石のことか　所謂花崗石者。卽御影石乎。

第三章　敍述之種類　其一(以動詞爲述語)

〔二〕動詞爲述語之時。有祇用述語。已能充分敍述者。有須以客語補語助述語。敍述之意義始完全者。

〔一二〕月出づ

馬躍る

右文之述語出づ・躍る・皆爲自動詞。故無須客語與補語。亦能完全敍述。

〔一三〕勉勵衆に超ゆ　勉勵超於衆。

冰水となる　冰爲水。

右文如但云「勉勵超ゆ」「冰なる」。則不能完其敍述之意義。必加補語之衆に、冰と。其敍述始完全。

〔一四〕老母子に先たる。（自動詞之受身之相）　老母被子先（猶言子先於老母）

實朝公曉に殺さる。（他動詞之受身之相）　實朝被殺於公曉。

義經平氏を討つ（他動詞之通常之相）　義經討平氏。

我軍敵を退却せしむ（自動詞之使役之相）　我軍使敵退却。

敵我軍に退却せしめらる（自動詞之使役之受身之相）

敵爲我軍所使退却。

右文皆須加一客語。其敍述之意義。始能完全。

〔一五〕教師生徒に文法を授く（他動詞之通常之相）　教師授文法於生徒。

賴朝義經を平氏を討たしむ（他動詞之使役之相）

賴朝使義經討平氏。

義經賴朝より平氏を討たしめらる（他動詞之使役之受身之相）　義經爲賴朝所使討伐平氏。

右文須有二個客語。其敍述始能完全。

〔一六〕米人華盛頓を大統領と定む　（他動詞之通常之相）　美人定華盛頓爲大統領。

右文皆加一客語與一補語。其敍述始能完全。

〔一七〕觀以上所述。可知動詞爲述語（表示何物爲何作用之關係）之時。有以客語補語。爲敍述之一部者頗多。

〔一八〕客語補語。雖爲普通之體言。但以用言作爲體言用者。有時亦可作爲客語補語用。可知凡可爲主語者。皆可作爲客語補語用。

〔一九〕天くらくなる　天黑矣。

風俗野鄙になる　風俗野鄙。

其德を二三にす　二三其德。

觀右例可知形容詞及副詞。有時亦可作爲敍述之補語用。

（注意）辱くす重くす一にす以てす等。雖亦屬於此種類。但此

等則可視爲一動詞。

練習二　請將左列文句中。所以助動詞敍述之客語及補語摘出。

(イ)　艱難汝を玉にす　　艱難玉汝。

(ロ)　丹砂を化して黃金となす　　化丹砂爲黃金。

(ハ)　文武の功臣に爵位を授く　　授爵位於文武功臣。

(ニ)　朱に交れば赤くなる　　近朱則赤。

(ホ)　刻苦して蘭學を修め遂に蘭學者の泰斗となれり　　刻苦修蘭學。遂爲蘭學者之泰斗。

(ヘ)　西洋人は薔薇を花の王　　西洋人稱薔薇曰花王。

といふ

(ト)　利根川は一名を阪東太郎といふ　利根川一名阪東太郎。

第四章　敍述之種類　其二(以形容詞或助動詞之如爲述語)

〔三〇〕花美。し　花美。

月明。なり　月明。

右爲祇用一述語。能完全敍述之文。

〔三一〕六は三。より多。し　六多於三。

苛政は虎。よりも猛。なり　苛政猛於虎。

右爲加補語以完全其敍述之文。

〔三二〕月色銀。の如。し　月色如銀。

容貌愚なるが如し　　容貌如愚。

以助動詞之如し爲述語。則不可無補語。

第五章　敍述之種類　其三(以助詞爲述語)

前二章所言。皆關於以動詞或形容詞爲述語者。卽「何物爲何作用」「何物爲何狀」二種關係之文也。以助動詞或助詞爲述語。乃表示「何物爲何物」之關係也。

〔三三〕正成は忠臣なり　　正成忠臣也。

東京は大都會たり　　東京大都會也。

在右例。助動詞之なり、たり爲述語。正成、東京爲主語。此關係在言「正成爲何人」「東京爲何地」。故不可不以忠臣、大都會等體言答之。於此之時。なり、たり文法上雖爲述語。然敍述之要部。則在體言。

〔三四〕これは何ぞ。　　此爲何物。

鯨は魚か。　鯨亦魚乎。

右文中之助詞ぞか。皆爲述語。此亦表示「何物爲何物」之關係者。然助詞之上。則不可無體言。

〔三五〕如以上所述。體言之在なり、たり或助詞之上。爲敍述之要素者。亦可視爲一補語。

〔三六〕於此之時所用之補語。通例爲體言。作爲連語。續於こと、もの、ため、所以、所、等體言者亦不少。

練習三　請將左列文句中所以助形容詞、助動詞、助詞敍述之補語摘出。

(イ)筆は劍よりも鋭し　筆鋭於劍。

(ロ)光陰は矢の如し　光陰如矢。

(ハ)海水は河水よりも重し　海水較河水爲重。

(ニ) 太白月よりも明なり　太白明於月。

(ホ) 不義の富は浮雲の如し　不義之富如浮雲。

(ヘ) 世界は大學校なり艱苦は良師友なり　世界大學校也。艱苦良師友也。

(ト) 過ぎたるはなほ及ざざがる如し　過猶不及。

(チ) 時は黄金なり　時黄金也。

(リ) 蝙蝠は鳥なりやはた獸なりや　蝙蝠爲鳥乎。抑獸乎。

第六章　文主

〔二七〕太郎は性質音樂に適す　太郎性質適於音樂。

右文之適す爲述語。性質其主語也。如以言「性質音樂に適す」之

文。爲全文之述語。則太郎。大有爲全文主語之觀。和文之有此形式者不尠。此卽將全文之題目揭出。依此作思想之敍述者。如此所用之題目。謂之文主。

〔三八〕兎は耳長し　兎耳長。

我軍は士卒勇敢なり　我軍士卒勇敢。

如右之以形容詞爲述語之時。則多用文主。

〔三九〕落花心あり流水豈情なからんや　落花有心。流水豈無情乎。

劍は勇の德あり鏡は智の德あり玉は仁の德あり　劍有勇之德。鏡有智之德。玉有仁之德。

如右之以動詞あり爲述語之時。亦多用文主。

（注意）將全文爲一文。視文主爲其主語。實際之主語之形式。則

甚似補語。

〔三〇〕代數學は余已に之を學べり　代數學余已學之。幾何學則尙未之學。

幾何學は余未だ之を學ばず

右文之意義。爲「余已に代數學を學べり。未だ幾何學を學ばず」。但上則其欲明顯。故特言代數學幾何學。下則復用代名詞「之を」反復言之。似此復用一客語。一若文主者亦有之。

〔三一〕太郎には教師之に文法を教へ次郎には教師之に讀本を教ふ　太郎則教師教以文法。次郎則教師教以讀本。

此卽用第二客語。一若文主者。

(注意)如〔三〇〕〔三一〕。則不得視爲文主。

練習四　左列文句中。何者爲文主。何者爲主語。請分別言之。

(イ) 益軒子なし　益軒無子。
(ロ) 象は體大なり　象之體大。
(ハ) 粘土は其粒細し　粘土其粒細。
(ニ) 都會の人民は見聞廣し　都會之人民見聞廣。
(ホ) 人は皆惻隱の心あり　人皆有惻隱之心。
(ヘ) 虎は其性猫に類す　虎之性類猫。
(ト) 勇氣乏しき人は成功すること難し　乏於勇氣之人難成功。
(チ) 滿堂の紳士淑女袂をしぼらぬものなし　滿堂之紳士淑女。無不下淚者。

第七章　文之要素之省略

〔三二〕文之主語、述語、文主、客語、補語等。皆爲構成文章之最重要部分。故謂之文之要素。雖然。往往有可省略者。

〔三三〕人の短をいふことを勿れ　勿言人之短。

枝を折るべからず　不可折枝。

一寸の光陰輕んずべからず　一寸之光陰。亦不可浪費。

如右之表示命令之文。通例將主語略之。

賴朝を征夷大將軍に任ず　(朝廷)以賴朝任征夷大將軍。

詔して憲法を頒ち又皇室典範を定む　(天子)詔頒憲法。又定皇室典範。

伏して惟るに　(臣)伏惟。

明日出發し明後日到着す　(余)明日出發。後日可到。

べし

右等皆將主語省略者。和文省略主語之處甚多。

〔三四〕月色銀の如しこの良夜を　月色如銀。如此良夜何。

如何(にせん)

伏して冀くは御購求あらんことを(乞ふ)　敬請購買。

諺に曰く塵も積れば山と成ると(いへり)　諺曰積塵亦可爲山。

生還するもの三人のみ(なり)　生還者僅三人耳。

勉强は幸福の母(なり)　勉强幸福之母也。

この年卽位す年甫めて十三(なりき)　是年卽位。年甫十三。

〔三五〕實朝の(公曉に)弑せられしは承久元年なり　實朝之被弑於公曉。實爲承久元年。

終日(友を)待てども遂に來ずず　雖待之終日竟不來。

疑義あるものは(其疑義を)(余に)質問すべし　有疑義者。當將其疑義問余。

如右之將客語省略者亦不尠。

練習五　請以適當之要素。補於左列文句之中。

(イ)功五級に敍し金鵄勳章及年金三百圓を賜ふ　敍功五級。賜金鵄勳章及年金三百圓。

(ロ)花は櫻木人は武士　謬曰。花則櫻花。人則武士。

(ハ)論より證據　實行貴於言論。

(ニ) 福は內鬼は外　福則入內。鬼則外出。

(ホ) 雲か山か吳か越か　雲耶山耶。吳耶越耶。

(ヘ) 本規則は來る九月より實行す　本規行由九月實行。

(ト) 大山元帥をして滿洲軍總指揮官たらしむ　使大山元帥爲滿洲軍總指揮官。

(チ) 本居宣長本姓は小津氏幼名富之助後孫四郎又健藏と改む伊勢國松坂の人世世醫を業とす二十七歲にして始めて國學に志し賀茂眞淵の門　本居宣長本姓小津氏。幼名富之助。後改孫四郎。又改爲健藏。伊勢國松坂人。世業醫。二十七歲始有志於國學。入賀茂眞淵之門。研究古典。

に入り古典を研究す

第八章　修飾語之一

〔三六〕文章除文之要素外。尙有爲形容文之要素。或限定其意義用之語。此謂文之修飾語。

〔三七〕修飾語有修飾文中之體言者。有修飾文中之用言及副詞者。

其一　形容詞的修飾語

〔三八〕若き齡は重ねて來らず　少年不再來。

富士山は皚皚たる白雪を　富士山戴皚皚之白雪。

戴く

形容詞之若き及皚皚たる係形容體言之齡及白雪。故爲修飾語。

〔三九〕眠れる兒は神の如し　睡眠中之兒如神。

吹く風寒からず　風吹而不寒。

動詞之眠れる、吹く係修飾體言之兒及風者。同形容詞。

如右之用言(及活用連語)之連體格。卽連於體言之上。爲修飾體言用者。

〔四〇〕我が國は神國なり　我國神國也。

少年の時重ねて來らず　少年之時不再來。

汝の答案を示せ　請將汝之答案示我。

一盃の水は一車薪の火を消すこと能はず　一盃水不能救一車薪之火。

如右之件助詞がの之連語。亦同形容詞。爲修飾體言用者。

〔四一〕我國に於ける男女の數は　我國男女之數。

男約二千萬女凡二千萬なり　男約二千萬。女約二千萬。

右之於。ける。本爲動詞。今則作爲助動詞用。故言「我國に於ける」。猶之言「我國の」也。故終於於。ける。之連語。亦可視爲形容詞的修飾語。在文。中。修。飾。體。言。者。謂之。形。容。詞。的。修。飾。語。

第九章　修飾語之二

其二　副詞的修飾語

〔四二〕少年の時重ねて來らず　少年之時不再來。

我が心始めて平なり　我心始平。

友人遂に來らず　友人竟不來。

右之重ねて始めて遂に皆爲副詞。乃限定來らず平なり等用言者。故亦爲修飾語。

〔四三〕六時に出發し八時に到着す　六時出發。八時到達。

一艦に北へ向ひ一艦は南へ向ふ　一艦向北發。一艦向南往。

答案は毛筆にて認むべし　答案當用毛筆寫。

鐵道を釜山より京城まで布設す　自釜山至京城。布設鐵路。

六歲にして小學に入り二十二歲にして大學を卒業す　六歲入小學。二十二歲卒業大學。

如右之助詞に、へ、にて、より、まで、にして、と、として之連語。其性質與副詞相同。概爲修飾種種用言或活用連語者。

（注意）（一）よりの、への、までの等之の用於結尾者。亦屬於形容詞的修飾語。例如

東京までの旅行　到東京之旅行。

學者としての松平樂翁　爲學者之松平樂翁。

(二) 客語補語。亦有伴を、に、と、より等助詞者。此與副詞的修飾語。亦有區別。其可視爲副詞者。大抵如左之數種。

(イ) 關於動作所起之場所、方位、時間或其度數者。例如

東京に行く　往東京。　南方に去る　往南方。

六月に開く　六月開。　二回に拂ふ　分二次支。

(ロ) 關於動作之器具材料者。例如

筆にて書く　以筆書。　機は木にて作る　機以木製之。

(ハ) 關於動作之方法者。例如

突然として來る　突然而來。　何心なしに行く　無心而行。

(三) 請將伴於修飾語之にして、として與在形容動詞

間之にして、として區別之。

在文中修飾用言及副詞者謂之副詞的修飾語。

〔四四〕六歲小學に入り二十二歲大學を卒業す

六歲入小學。二十二歲卒業大學。

この時大勢なほ定まらず風雨の夜兄弟牀をならべて千古の懷を敍す

當時大勢尙未定。風雨之夜。兄弟連牀敍千古之懷。

翌朝戰場が原を横ぎりて湯元に向ふ

翌朝戰場橫原而向湯元。

次の日は東照宮に詣づ

次日謁東照宮。

三月十七日釜山港に舟を浮へ四月四日大坂につく

三月十七日放舟於釜山港。四月四日到大坂。

惡疫流行の際はことに衞生に注意すべし　惡疫流行之際。尤當注意於衞生。

天地開闢以來君臣の分自ら定まれり　自天地開闢以來。君臣之分已定。

如右等之副詞的修飾語之下。將助詞省略者亦頗多。

〔四五〕今日の事情に於ては甚だ困難なり　在今日之情形。則甚困難。

何の理由を以て之を拒絕するか　以何理由拒絕之乎。

右之於て。以て等。雖本爲動詞。但今文則全作爲助詞用。屬於副詞的修飾語者亦頗多。

〔四六〕朝の六時に出發し夜の八　朝六時出發。夜八時到達。

時に到着す

答案は細き毛筆にて認む　答案須以細毛筆寫。

べし

靜に眠れる兒は神の如し　靜眠之兒如神。

右之加黑點之字。乃修飾語之復加修飾者。修飾語中體言。則以形容詞的修飾語修飾之。用言及副詞。則以副詞的修飾語修飾之。修飾語復加修飾語。文章遂漸漸複雜矣。

〔四七〕依左例以觀。可知簡單之文。加以種種之修飾語。則漸成複雜之文矣。

(1) 猫鼠を捕ふ　猫捕鼠。

(2) 小き猫大なる鼠を捕ふ　小猫捕大鼠。

(3) 小き黑毛の猫大なる白　黑色之小猫。捕大白鼠。

き鼠を捕ふ

(4) 鄰の小き黒毛の猫椽の下の大なる白き鼠を捕ふ

鄰家小黒毛之小猫。捕牀下之大白鼠。

(5) 鄰の甚だ小き黒毛の猫椽の下の極めて大なる白き鼠を巧に捕ふ

鄰家甚小之黒毛之猫。善捕牀下極大之白鼠。

(6) 鄰の寺の甚だ小き黒毛の猫椽の下の極めて大なる白き鼠を最も巧に捕ふ

鄰寺甚小之黒毛之猫。最善捕牀下之極大之白鼠。

(7) この頃時時鄰の寺の甚

近來屢見鄰寺甚小之黒毛之

だ。小。き。黒。毛。の猫。わ。が。家。猫。最善捕我家牀下之極大之

の。椽。の。下。の。極。め。て。大。な。白鼠。

る。白。き。鼠を最も巧に捕

ふ

右之種種修飾語。在修飾何語。請細察之。

〔四八〕如右之修飾語之上。尙可再加修飾語。雖然。實際之文。用修飾語如是之多者。亦殊罕覯。

修飾語。常。在。被。修。飾。語。之。上。

練習六　請將種種修飾語。加於左列單簡之文之上。

(イ)犬走る。

(ロ)太郎書を讀む。

練習七　請將左列文句中之形容詞的修飾語及副詞的修飾語

摘出。

(イ)

直に西方に向ひて今なほ茫茫たる古の那須野原に入る

直向西方。而入今尙茫茫之那須野原。

(ロ)

秀秋十六歳にして征韓の大將軍を承りて宗徒の大名あまた引具し都合之の勢十六萬三千人五月二十二日大阪を立ちて七月二日朝鮮におし渡り釜山城に入る

秀秋年十六。爲征韓大將軍。率宗室諸侯。衆凡十六萬三千人。五月二十二日發大阪。七月二日至朝鮮。入釜山城。

(一)

見よ見よ木々の綠も浮

請觀綠樹浮雲秀嶺流水懸巖

べる雲も秀づる嶺も流　風聲日光雞聲天色。皆非下界之物。
る丶溪も峙つ巖も吹き
來る風も日の光も雞の
聲も空の色もみな自ら
憂世のものにあらず

第十章　單文

〔四九〕貓　鼠を　捕ふ　　貓捕鼠。

鄰の寺の甚だ小き黑毛の　鄰寺甚小之黑毛之貓。最善於捕牀下之極大之白鼠。
貓椽の下の甚だ大なる白
き鼠を最も巧に捕ふ

右二文其長短雖不同。然其主語爲貓。其述語爲捕ふ。主語與述語之關係。卽何物爲何作用則一也。後者不過附加修飾語。文式較爲

複雜耳。

〔五〇〕貓、鼠、狐、馬、牛、象、獅子、虎は哺乳獸十り。

右文有八個主語。如分別言之。則有八箇述語如左。

貓は哺乳獸なり。

鼠は哺乳獸なり。

狐は哺乳獸なり。

馬は哺乳獸なり。

牛は哺乳獸なり。

象は哺乳獸なり。

獅子は哺乳獸なり。

虎は哺乳獸なり。

上節所列之文。不過將八主語集合。使有一共同述語耳。其關係卽

「何物與何物爲何物」也。

〔五一〕農夫は耕作し、收穫し、租稅を納む。　農夫耕作收穫納租稅。

右文祇有一主語。其述語。則有耕。作。す。收。穫。す。租。稅。を。納。む。三者。如分別言之。則成左之三文。

農夫は耕作す。

農夫は收穫す。

農夫は租稅を納む。

上節所列之文。不過集合之使有一共同一主語耳。此關係卽「何物爲何作用及何作用」也。

〔五二〕余は學校にて修身國語英語理語理科算術圖畫體操唱歌　余在學校。學修身國語英語理科算術圖畫體操唱歌。

を學ぶ

父は財産を太郎次郎三郎四郎五郎に讓る　父讓財産於太郎次郎三郎四郎五郎。

右爲有多數客語之例。此關係卽「某某對某某而行某事」也。

〔五三〕太郎は詩文を甲先生に學び圖畫を乙先生に受け音樂を丙先生に學ぶ　太郎學詩文於甲先生。學圖畫於乙先生。學音樂於丙先生。

右爲客語述語皆有二箇以上之文例。

〔五四〕兄と弟とはともに勞動し　兄與弟同勞動。同用功。

ともに勉强す

右爲共同主語有共同述語之文例。

〔五五〕觀以上自〔五〇〕至〔五四〕之例。可知無論主語述語客語之數多

少。其主語與述語之關係。在文法之形式。皆一回卽成立者。如以〔五三〕之例而言。卽謂「太郎學詩文於甲先生。學繪畫於乙先生。學音樂於丙先生」而「何物爲何作用」之文法上構造。亦祇有一回成立耳。

如此。主語與述語之關係在文法上之形式。祇有一回之成立者。謂之單文。

〔五六〕文之有多數共同述語者。惟最後之述語。以適當之終止格結之。其他皆用連用格。觀〔五一〕〔五三〕〔五四〕之例便知之。

〔五七〕(イ)數學を復習し次に讀本を復習したり　温習數學。次温習課本。

(ロ)第一大隊をして甲地に向ひ第二大隊をして乙向ひ　使第一大隊向甲地。使第二大隊向乙地。

地に向はしむ

(ハ)　十六時間の戰鬪中一滴の水も飲まず一粒の糧食も食はざりき　十六時間之戰鬪中。點水亦不飲。粒米亦不食。

(ニ)　第一大隊をして甲地に向はしめ第二大隊をして乙地に向はしむ　使第一大隊向甲地。使第二大隊向乙地。

(ホ)　その德行仰くべく貴むべし　其德行可仰可貴。

觀右例。(イ)(ロ)卽助動詞之不反復者。(ハ)(ニ)(ホ)卽助動詞之反復者。

練習八　請將左列單文之主語述語客語補語摘出。

(イ)　動物は互に生存を競爭　動物互相競爭生存。或爭居處。

し或は居處を爭ひ或は食物を爭ふ

或爭食物。

(ロ) 空中の水蒸氣凝結して或は雨となり或は雪となり或は霰となり或は雹となる

空中之水蒸氣。凝結爲雨。或爲雪。或爲霰。或爲雹。

(ハ) 父母は我を生み我を養ひ我を長ぜしめ我を教ふ

父母生我。養我。長我。教我。

(ニ) 横須賀、吳、佐世保、舞鶴は日本の軍港なり

横須賀、吳、佐世保、舞鶴。日本之軍港也。

(ホ) 誠實と勤儉とは商人の

誠實與勤儉。乃商人之二大德

二大德行なり　行也。

(ヘ)

木曾山には檜、欅、松、槇杣の良材多し　木曾山富於檜欅松槇杣等良材。

(ト)

水戸中納言光國卿は賴房卿の第三子東照君の御孫なり　水戸中納言光國卿。爲賴房卿之第三子。東照宮之孫。

(チ)

余は每朝六時に起き七時に朝食を終へ八時より午後三時まで學校に學び四時より六時まで運動し七時に晩餐を喫し八時まで街上に散步　余每朝六時起牀。七時早飯。自八時至午後三時。學於學校。自四時至六時運動。七時喫晩餐。至八時散步於街上。自九時至十時溫習。十時就寢。

く九時より十時まで復習し十時眠に就く

第十一章　句複文

〔五八〕

(イ) 秋風吹く　　秋風吹。

(ロ) 貓鼠を捕ふ　　貓捕鼠。

(ハ) 余は六時に起き八時に學校に出で正午家に歸る　　余六時起牀。八時上學校。正午歸家。

右等皆單文也。

〔五九〕

(イ)

「秋風吹け」ば。

「秋風吹け」ども。

「秋風吹く」に。

（ロ）「猫鼠を捕ふれ」ば。
「猫鼠を捕ふれ」ども。
「猫鼠を捕ふる」に。

（ハ）「余は六時に起き八時學校に出で正午家に歸る」が。
「余は六時に起き八時學校に出で正午家に歸れ」ども。
「余は六時に起き八時學校に出で正午家に歸る」に。

如右之將文之述語連接於助詞ば、ども、に、とも、が、を、のみ、すら、は、もの、や等。皆作爲他文之一部者。

如此。失文之獨立作爲他文之一部者。謂之句。

〔XO〕「秋風の吹く」時。　秋風生之時。

「猫の鼠を捕ふる」方法。　猫捕鼠之方法。

「余の六時に起き八時學校　余之六時起牀。八時上校。正午

に出で正午家に歸る」習慣　歸家之習慣。

如右之置全文於體言之上。作爲體言之修飾語者。亦句也。

句之用法厥有種種。

〔六一〕詩人は「秋風の吹く」を悲む　詩人悲秋風之聲。

「猫の鼠を捕ふる」は甚だ巧なり　猫之捕鼠甚巧。

君は「余の六時に起き八時に學校に出で正午家に歸る」を知れり　君知余之六時起牀。八時上校。正午歸家。

右乃用一文爲主語或客語例。

句之作爲主語客語補語等文之要素用如右例者亦頗多。

〔六二〕魚釣は「秋風の吹く」時よし　釣魚以秋風生之時爲佳。

とす

「猫の鼠を捕ふる」方法を見よ　請觀猫捕鼠之方法。

君は「余の六時に起き八時に學校に出で正午家に歸る」習慣を知るか　君知余之六時起牀。八時上校。正午歸家之習慣乎。

右卽以文中之體言。作爲修飾語(卽形容詞的修飾語)用者。(參照第八章)

句之作爲修飾文中體言之形容詞的修飾語用者亦頗多。

(六三)「秋風吹けども木葉落ちず　秋風吹而木葉不落。

「猫鼠を捕ふる」に犬夜を守らず　猫捕鼠。而犬不守夜。

「余は六時に起き八時に學校に出で正午に家に歸れ」　余雖六時起牀。八時上校。正午歸家。而君則終日在家。

ども君は終日家に在り

如右之用法。上文則作爲副詞的修飾語。以修飾下文之述語。(參照第九章)

句之作爲修飾文中用言之副詞的修飾語用者亦頗多。

〔六四〕

(イ)

秋風の吹く時の初には　秋風始至之時。

猫の鼠を捕ふる方法の功拙を　猫捕鼠之方法之功拙。

余の六時に起き八時に學校に出で正午に家に歸る習慣の可否は　余六時起牀。八時上校。正午歸家之習慣之可否。

秋風の吹くに際し　秋風正緊之際

猫の鼠を捕ふるにあたり　當猫之捕鼠。

余の六時に起き八時に學校に出で正午家に歸る習慣あるより　因有余六時起牀。八時上校。正午歸家之習慣。

(ロ)

右等皆作爲附線之部分全體。(イ)爲形容詞的修飾語。(ロ)則爲副詞的修飾語。故句有作爲更大之修飾語。而含於其中者。(參看第九章四十七節)

〔六五〕如以上所述。句或作爲文之要素用。或作爲要素之修飾語用。或用爲修飾語中之他語修飾語用。以此可知文中之含句者。其形式皆非常複雜。

〔六六〕詩人は「秋風の吹く」を悲む　詩人悲秋風之聲。

請就右列文中之含句者。觀其主語與述語之關係。主語之詩人。與

述語之悲。之間。所謂詩人悲之主語述語文法上關係。一回已成立。然句中「秋風吹」之關係。亦一回成立。於此之時「何物爲何作用」之關係則已二回成立。故此文非單文也。

月滿つれば缺く　　月滿則缺。

右例中雖有「月滿」之句。然「缺」之主語亦「月」也。以其爲「月爲何作用又爲何作用」之關係。故仍可謂之單文。

含有。一。句。以。上。而主。語。述。語。之。關。係。文。法。上。之。成。立。在。二。回。以。上。者。謂之。複。文。

〔六七〕正成答へて「陛下願くは御心を安じ給へ」と奏す　　正成答奏曰「願陛下安聖慮」。

如右之單文中含有獨立之單文者。亦複文也。

練習九　請將左列文中之句摘出。

(イ) 猿の木に上るは甚だ巧なり　猿之登樹甚巧。

(ロ) 小兒の喫煙するは發育に害あり　小兒之喫煙。有害於發育。

(ハ) 瞥見す大魚の波間に跳るを　瞥見大魚躍出水面。

(ニ) その響は萬雷の吼ゆるが如し　其聲如萬雷之吼。

(ホ) 波の起る原因は風と地震との二つなり　生波之原因。爲風與地震二者。

練習十　左例中何者爲單文。何者爲複文。請區別之。

(イ) 樹靜ならんと欲すれど　樹雖欲靜。而風不止。子雖欲養。

も風やまず子養はんと欲すれど親待たず　而親不之俟。

(ロ) 風吹きすさみて波を起す　風起而生波。

(ハ) 風吹きすさめども波立たず　風雖狂而無浪。

(ニ) 謙信兵を帥ゐて川中島に陣す　謙信率兵陣於川中島。

(ホ) 金剛石も磨かずば玉の光は添はざらん　雖金剛石。不磨則不能增玉之光。

(ヘ) 千丈の堤も螻蟻の穴より崩る　雖千丈之堤。亦由蟻穴而潰。

(ト) 尺蠖の伸びんとするや　尺蠖之欲伸也。則先屈其身。

まづその身を屈す

第十二章　節　重文

〔六八〕秋風吹く　木葉落つ

猫鼠を捕ふ　犬夜を守る

右爲四箇單文。

秋風吹けども木葉落ちず　秋風生而木葉不落。

猫鼠を捕ふれども犬夜を守らず　猫雖捕鼠。而犬不守夜。

如右則爲二箇之複文。前章已詳言之矣。

秋風吹き木葉落つ　秋風生。木葉落。

猫は鼠を捕へ犬は夜を守る　猫捕鼠。犬守夜。

如右二句。上文則不能獨立。祇能作爲一大文中之一部。雖然。於此之時。上文決不爲下文之附屬。實與下文相對。並立於同等之位置者。

如是。在。文。中。並。立。於。同。等。之。位。置。者。謂。之。節。含。有。二。節。以。上。者。謂。之。重。文。

(注意)上文之連續於助詞之て。者。有時可爲其下文之附屬。有時則相對立。頗不易區別。如上文爲原因。下文爲結果。則概爲附屬句。

〔六九〕天は高く地は低し　天高地低。

月は明に星は稀なり　月明星稀。

柳は綠に花は紅なり　柳綠花紅。

大河滔滔として連山巍峨　大河滔滔。連山巍峨。

たり

右皆爲重文。含有以形容詞爲述語之二文節者。依此例可知以形容詞爲述語。置於上之文節時。通常形容詞。則用連用格之く。形容動詞。則用其原形。而不連於あり。

〔七〇〕余彼を愛し彼亦余を愛せ　余愛彼。彼亦愛余。

去年は中學校の撰手優勝旗を得今年は師範學校の撰手優勝旗を得たり　去年中學校之撰手得優勝旗。今年師範學校之撰手得優勝旗。

依右例可知文節重疊之時。時之助動詞。則置於最後之文節。

〔七一〕彼も之を知らず余も亦之を知らざりき　彼不知之。余亦不知之。

帆は風に取られ楫は波に碎かる。　帆爲風所奪。楫爲浪所碎。

陸軍は第三軍をして旅順に向はしめ海軍は第二艦隊をして浦鹽斯德に向はしめたり　陸軍使第三軍往旅順。海軍使第二艦隊往浦鹽斯德。

太郎は算術を復習すべく次郎は文法を復習すべし　太郎當温習算術。次郎當温習文法。

頭は猿の如く尾は蛇の如し　頭如猿。尾如蛇。

觀右列數例。可知打消、受身、使役、法、比較等助動詞。大抵每一文節多反復用之。(參照五七節)

〔七二〕春來れども花笑かず秋立てども葉落ちず　春來而花不開。秋至而葉不落。

右列之各文節。皆複文也。複文之重疊者。亦爲重文。

練習十一　請將左列之文節指示。

(イ)鳥空に舞ひ魚淵に躍る　鳥舞於空。魚躍於淵。

(ロ)金剛石は萬物の中最も硬き寶石にして其價も亦最も貴し　金剛石爲萬物中最硬之寶石。其價亦最貴。

(ハ)富士山は高山にて其形白扇を倒に懸けたるが如し　富士山高山也。其形如倒懸白扇。

(ニ)水落ち石出づ　水落石出。

（ホ）兩岸の綠樹鬱蒼として　兩岸之綠樹。蒼翠而悅目。大江目を樂ましめ大江の碧　之碧流。滔滔以洗心。流滔滔として心を洗ふ

〔七三〕依以上所學。知文章視其構造。可分爲三種如左。

一　單文

二　複文

三　重文

〔七四〕專用單文。無論如何思想。吾人俱能表示之。惟連用單文。則流於平板。且不免有煩冗之嫌。故或用複文。或用重文。使三種交用。則變化益多。而文章之美。亦於是乎在。

第十三章　文之性質上之種類

文章視其性質。可分爲四種如左。

〔七五〕西郷木戸大久保を維新の三傑といふ　西郷木戸大久保。謂之維新之三傑。

地球は一年を以て太陽を一週す　地球以一年繞太陽一週。

如右之直行敍述思想。說明事實者。謂之平敍體之文。

〔七六〕汝は月の盈缺する理由を知るか　汝知月之盈缺之理由乎。

余を咎むるものは何人ぞ　咎余者何人。

三と五とを加へて其和幾何　加三與五。其和幾何。

天下何の地か山なからん　天下何地無山。何處無月。

何の處か月なからん

如右之文中含有疑問。或反語之意義者。謂之疑問體之文。

〔七七〕來れ汝に語らん　來吾語汝。

片時たりとも父母の厚恩を忘るべからず　雖片時亦不可忘父母之厚恩。

己の長をいふことと勿れ人の短をいふことと勿れ　勿言己之長。勿言人之短。

如右之表示命令之義者。謂之命令體之文。

〔七八〕嗚呼悲しくかな歎ずべきかな　嗚呼悲哉。可歎哉。

如右之表示感動之意義者。謂之感動體之文。

〔七九〕豈にそれ然らんや誰か之を知らんや　豈其然哉。誰知之哉。

右乃疑問文之下。復加感動助詞。作爲感動體之文者。

〔八〇〕若し果して然らんかこれ　果如是則誠可憂之至。

實に憂ふべきの至なり

一月の軍費一千萬圓とせ　假定一月之軍費一千萬圓。一

んか一年にては一億二千　年則一億二千萬圓。

萬圓なり

如右之用疑問文。專表示條件者亦有之。

〔八一〕歎ずべきの至ならずや　非可歎之至乎。

嗚呼これ我友某氏の遺稿　嗚呼。此卽吾友某氏之遺稿乎。

なるか

如右之以疑問文表示感動之意義者亦有之。

〔八二〕吾人專用平敍文。亦可表示一切思想。例如疑問之文「知月之盈缺之理乎。」如用平敍文。「當改爲我不知汝知月之盈缺之

理由與否」命令文之「來」。如用平敍文。當改爲「余命汝來」。惟專用平敍體之文。則不免有單調平衍之弊。交用此四文體文。其變化遂多。此卽語之妙用。文之妙處也。

第十四章　係結之法則

〔八三〕從普通之順序。則爲述語之用言。(或助動詞)當在文之最後。但其結法。恆視文體而異。此謂之係結之法則。

〔八四〕正成は忠臣なり。　正成忠臣也。

知る人ぞ知る。　知之者其知之。

何ぞ誤れるの甚しき。　何誤之甚也。

我こそは無官の大夫敦盛なれ。　我乃無官之大夫敦盛。

好きこそ物の上手なれ。　其所好卽其所長。

右皆平敍體之文也。於是遂生左列之諸規則。在平敍文。

(一)述語以終止格結之。爲通例。

(二)其上有助詞之ぞ。述語則以連體格結之。

(三)其上有助詞こそ。述語則以已然格結之。

〔八五〕誰か鳥の雌雄を知らん。　誰知鳥之雌雄。

之を知らぬ人やある。　豈有不知者。

在疑問文。疑問助詞之ぞ、か、や、等。亦有置於句末者。但置於述語之最後者。則常用連體格結之。

在疑問文。助詞之ぞ。決無在述語之上者。又決不用助詞こそ。

〔八六〕涙あるものは泣け。　有涙者其哭矣。

己の長をいふこと勿れ。　勿言己之長。

如右命令文之述語則在句末。以命令格結之。命令文用命令助詞

之よな等於文尾者頗多。可し本爲推量助動詞。轉成命令助動詞者。故仍用終止格結之。同平敍文。

凡命令文中。決不用ぞ、や、か、こそ等。

〔八七〕嗚呼甚しいかな　嗚呼甚哉。

如右感動體之文。感動詞則常在最后。

〔八八〕雪ぞ降り出でたれば……　雪降則……

この心得こそ何人も守る　此心得無論何人俱守嚴守之

べきに……　但……

如右之在句中之や、か、ぞ、こそ之類。與最後之文之結法。無何等影響。

練習十二　左列文句中係結之錯誤者。請更正之。

(イ)　此地は老樹枝を交へて　是處老樹參天。雖日中亦甚暗。

畫も尙暗き

(ロ) 文法を學ぶことを最も樂しき事なりといふべし

學文法可謂之最樂之事。

(ハ) 民を愍ませ給ふ御心の深さぞとの一事にて知られたり

愛民之心之深。可以此一事知之。

(ニ) 羅馬は一日に成らぬ

羅馬非以一日而成。

(ホ) 山は木あるを以て貴しとする

山以有木爲貴。

(ヘ) 跡白浪と、逃げ失せける

踪跡杳然。

(ト) 說とそ陳腐なり文章は頗る見るべし

其說甚陳腐。文章則頗可觀。

第十五章　文之解剖

〔八九〕今請言文之構造。卽應用所得之知識。將一二文分解之如左。

口徑十二吋礮の彈丸は三千ヤードの距離に於てよく十六吋のクルップ鋼鐵板を貫く

口徑十二吋礮之彈丸。在三千碼之距離。能貫十六吋之苦魯布鋼鐵板。

欲分解此文。

第一　須觀其主語與述語。　此文之主語爲彈丸。述語爲「貫く」。

第二　須觀主語述語以外之文之要素。　此文之述語貫く爲他動詞。助其敍述之客語爲クルップ鋼鐵板。

第三　須觀主語之修飾語。　爲此文主語之彈丸之修飾語。卽口徑十二吋礮之形容詞的修飾語。

第四　須觀述語之修飾語。　爲此文述語之貫く之修飾語。卽副詞よく及副詞的修飾語三千ヤードの距離に於ての

第五　須觀他要素卽客語補語等之修飾語。　爲此文客語クル。ップ。鋼鐵板之修飾語。卽十六吋の之形容詞的修飾語。

第六　此文之主語與述詞之關係。祇有一回成立。故爲單文。

第七　此文由其性質而言。則爲平敍體之文。

〔九〇〕夜は圓月の朦朧として瀧の上にのぼるを見たり　夜見圓月朦朧懸於瀑布之上。

第一　此文之述語。爲動詞之見たり。其主語爲觀月之人。例如「余」是也。但此處則省之。在省略主語之時。當將此意補入觀之。

第二　述語之見たり。爲他動詞。助其敍述之客語。則爲「圓月朦朧として瀧の上にのぼる」之句。

(一)此句之主語爲圓月。述語則形容詞之朦朧。として。與動詞之のぼる也。

(二)此句客語與補語俱無之。

(三)此句之主語圓月。無修飾語。

(四)述語のぼる。則有瀧の上に之修飾語。

(五)無客語故無修飾語。

(六)此句爲有一主語二述語之單文句。

(七)此句爲平敍體之單文句。

第三　此文省略主語。故無主語之修飾語。

第四　此文之述語之修飾語。卽副詞的修飾語之夜は。

第五　爲此文之客語之句。無修飾語。

第六　此文中含句。故爲複文。

第七　此文之性質。爲平敍體之文。

〔九一〕義家は奈古曾關外落花の歌を詠じ　義家則詠落花之歌。於奈古曾關外。

謙信は能州の陣營に明月の詩を賦す　謙信則賦明月之詩。於能州之營中。

第一　此文對於主語之義。家。則有述語之詠。じ。對於主語之謙信。則有述語之賦。す。此乃二箇之文節。並立於同等之地位者。

第二　對於述語詠。ず。之客語爲歌。

第三　爲主語之義。家。則無修飾語。

第四　述語之詠。ず。則有副詞的

第二　對於述語賦。す。之客語爲詩。

第三　爲主語之謙。信。則無修飾語。

第四　述語之賦。す。則有副詞

修飾語奈古曾關外

第五　客語之歌則有形容詞的修飾語落花の

第六　此文爲重文而含有二箇之文節其文節皆由單文而成者

第七　此文爲平敍體之文其二箇之文節皆由平敍體之文而成者

如是將文分解者爲文之解剖

第五　客語之詩則有形容詞的修飾語明月の

的修飾語能州の陣營に

日本文典終